

若者のコミュニケーションと価値観

片 桐 新 自

Communication Patterns and Values of Young People

Shinji KATAGIRI

Based on the 1992 research of university students, this paper aims at discussing communication patterns and values of young people in Japan. The research is designed to investigate two issues. One is to see whether or not ICCE values (Individualism, Conformism, Conservatism, and Epicureanism), which I concluded to be Japanese young people's main values in a 1987 research project, have changed in the past five years. The other is to clarify what communication patterns help to form ICCE values and what communication patterns are in return formed by ICCE values. From speculation based on the research, this paper will conclude that ICCE values have become more widespread among young people and that good relationships with parents and conformist relationships with friends are typical patterns within their communications. I think ICCE values spread inevitably in an affluent society losing its goal.

Key words: ICCE values (Individualism-Conformism-Conservatism-Epicureanism), communication pattern, young people, affluent society, gender, psycho-social moratorium

抄 録

本稿は、若者のコミュニケーションと価値観を大学生を対象とした調査データに基づいて論じたものである。研究の狙いは大きく言って二つある。一つは、5年前に同じ方法で調査し割り出した「個同保楽主義」という若者の価値観が根付いているかどうかを明らかにすることである。そしてもうひとつは、このような価値観がいかなるコミュニケーションから生み出され、いかなるコミュニケーションを生み出すのかについて考察することである。考察の結果として、前者に関しては、予想通り「個同保楽主義」の安定化が確認され、後者に関しては、良好な親子関係と、同調志向の強い友人関係等が浮び上がってきた。良好な親子関係は、若者たちの価値観に安定と協調を求める志向をもたらし、保守的で同調的な価値観を生み出す一因となっている。「個同保楽主義」という価値観は、豊かになり社会的目標が定められなくなった社会で必然的に広まらざるをえない価値観だと考えられる。

キーワード：個同保楽主義，コミュニケーション，若者，豊かな社会，ジェンダー，モラトリアム

はじめに

私は以前、「新人類たちの価値観」という論文¹⁾で、現代の若者の価値観として、「個同保楽主義」という価値観を提示した。これは、個人主義的だが、同調性も高く、大きな変化を望まない保守性を持ち、楽しく楽に暮していきたいと考える傾向が、若者の間で強まっていることを指摘したものである。その論文の基となった調査を行なったのは1987年だったが、その後5年経って、こうした価値観はさらに広まったのかどうかを検証してみたいと考えた。これが本稿をまとめたとき考えた最初のきっかけだった。この目的を達成するために、前回の調査票を検討し直して、約半数の質問項目を今回の調査票に入れることにした。さらに、今回の調査では、新たな問題意識として、こうした価値観がどのような人間関係の中で生み出され、またどのような人間関係を作り出していくのかを知るために、若者のコミュニケーションのあり方とその意識を捉えるための質問項目を増やした。具体的には、親子関係、男女関係——主として性役割——、友人関係、モラトリアム志向などである。結果的に見ると、あまり大きな変化の見られなかった前回調査との比較以上に、データの新鮮さもあって、この若者のコミュニケーションが今回の調査ではより重要なテーマとして浮び上がることになった。そこで当初の目的であった時系列比較を後に回し、はじめに若者のコミュニケーションとそれをめぐる意識について見ていきたい²⁾。

1. 両親評価に見る親子関係

前回の調査の際に、父母それぞれとの程度よく話すかという質問をしたところ、圧倒的に母親とのコミュニケーションが密であるという結果を得た³⁾。この父母コミュニケーションの相違は、若者の価値観にも影響を与えずにはおかないだろう。しかし、考えてみれば、日本社会の雇用形態の在り方からいって、母子のコミュニケーションが密になるのは、当然すぎるほど当然のことであり、歴史的に見ても最近急速に変化したものとは言えない。となると、問題はむしろ若

1) 片桐新自「新人類たちの価値観——現代学生の社会意識——」『桃山学院大学社会学論集』第21巻第2号、1988年。

2) 今回の調査は、1992年11月10日—12月8日にかけて、大学生（短期大学生も含む）を対象に行なったものである。調査は、主として授業時間を利用して自記式で記入してもらう方法をとった。調査対象となったのは、すべて文系の学生で606名だったが、内有効回答は585名で、その内訳は男子244名（41.7%）、女子341名（58.3%）である。この場を借りて、調査に協力していただいた603名の匿名の学生諸君と、直井優大阪大学教授、宮本孝二桃山学院大学教授、難波江和英神戸女学院大学助教授に感謝の意を表したい。

3) 父親とよく話すと答えた者は26.5%しかいないのに対し、母親とよく話すと答えた者は60.9%もいた。片桐新自、前掲論文、137頁参照。

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

者たちが親をどう見ているかにある。たとえ、話す機会は少なくとも父親が威厳ある尊敬すべき対象として見られているならば、子ども——特に息子——は父親の男性的価値観を積極的に継承する可能性は高いだろう。このあたりを明らかにするために、両親それぞれの評価をたずねた。

表1 両親の評価

実数(%)

〔父親の評価〕	非常に思う	まあ思う	あまり 思わない	全 く 思 わ な い	DK. NA.	得点
仕事熱心	290(49.6)	231(39.5)	49(8.4)	5(0.9)	10(1.7)	2.40
家族思い(やさしい)	178(30.4)	274(46.8)	100(17.1)	23(3.9)	10(1.7)	2.06
頼りがいがある	175(29.9)	268(45.8)	105(17.9)	27(4.6)	10(1.7)	2.03
尊敬できる	169(28.9)	267(45.6)	109(18.6)	30(5.1)	10(1.7)	2.00
自分を理解してくれている	69(11.8)	252(43.1)	196(33.5)	57(9.7)	11(1.9)	1.58
こわい	45(7.7)	116(19.8)	252(43.1)	161(27.5)	11(1.9)	1.08
うるさい	73(12.5)	145(24.8)	204(34.9)	152(26.0)	11(1.9)	1.24
うっとうしい	38(6.5)	112(19.1)	249(42.6)	176(30.1)	10(1.7)	1.02
〔母親の評価〕	非常に思う	まあ思う	あまり 思わない	全 く 思 わ な い	DK. NA.	得点
仕事(または家事)に熱心	286(48.9)	230(39.3)	57(9.7)	8(1.4)	4(0.7)	2.37
家族思い(やさしい)	270(46.2)	268(45.8)	38(6.5)	5(0.9)	4(0.7)	2.38
頼りがいがある	172(29.4)	269(46.0)	117(20.0)	23(3.9)	4(0.7)	2.02
尊敬できる	175(29.9)	279(47.7)	109(18.6)	18(3.1)	4(0.7)	2.05
自分を理解してくれている	145(24.8)	275(47.0)	130(22.2)	30(5.1)	5(0.9)	1.92
こわい	25(4.3)	103(17.6)	272(46.5)	181(30.9)	4(0.7)	0.95
うるさい	89(15.2)	198(33.8)	211(36.1)	82(14.0)	5(0.9)	1.51
うっとうしい	29(5.0)	106(18.1)	262(44.8)	182(31.1)	6(1.0)	0.97

(得点は、「非常に思う」を3点、「まあ思う」を2点、「あまり思わない」を1点、「全く思わない」を0点として計算した各項目の平均点。)

まず父親に関してみると、なんとといっても「仕事熱心」という評価が非常に高いことが目につく。現代の学生たちは第二次ベビーブーム世代と呼ばれ、彼らの親たちは、第一次ベビーブーム世代、あるいはその少し前に生まれた世代である。この学生たちの親の世代は1960年代以降の日本社会の中で新しい価値観を作り出してきた世代であるが、若者たちの目には、かつての父親たちと同様に非常に仕事熱心な人間として映っている。「家族思い」、「頼りがいがある」、「尊敬できる」という評価は、「仕事熱心」という評価に比べればやや落ちるが、それでも「そう思う」(「非常に思う」+「まあ思う」)という回答がいずれも7割を超え、やはり評価は高いと言えよう。プラスイメージのものの中でもっとも評価が低いのは、「自分を理解してくれている」という項目で、「そう思う」人の割合は、漸く5割を超える程度である。「仕事熱心で、家族思いの良い父親だが、自分の気持ちを十分にわかってはくれない」といった印象を、かなり多くの学生たちが持っていると言えよう。

全体的に父親の評価は高く、「こわい」、「うるさい」、「うっとうしい」というマイナスイメージを持つ学生は少ない。この中で注目したいのは、「こわい」という印象である。これは他の2

つと異なり、単なるマイナスイメージではなく、父親の威厳につながるものである⁴⁾。この印象が弱いということは、「威厳ある父親」像はもはや影が薄くなったということの意味すると見てもよいだろう。「尊敬できる」という評価がかなり高いことを考え合わせると、今や若者にとっての尊敬できる父親のイメージは「こわい威厳のある父親」から「優しく親しみやすい父親」へと変貌したと言えよう。実際に評価項目間の相関をとってみると、父親の威厳につながる「こわい」や「仕事熱心」より、やさしさにつながる「家族思い」の方が、「尊敬できる」という項目との関連度が高い⁵⁾。

見てきたように父親に対する評価も高いが、母親に対する若者の評価はさらに高い。特に、「家族思い」という評価は非常に高く、「そう思う」人の割合は9割を超える。父親の「家族思い」という評価も決して低くはなかったが、やはり比較すると、この点に関しては父親はとうてい母親にはかなわないようだ。「仕事熱心」という項目に関しても、9割近くの学生がそう思っており、評価は高い。「頼りがいがある」、「尊敬できる」、「自分を理解してくれている」は、いずれも「そう思う」人の割合が7割台である。父親と比べると、「頼りがい」と「尊敬」は、ほぼ同じような評価だが、「理解度」の評価はかなり高く、学生たちは母親の方がわかってくれるという意識を持っている。前回の調査で明確に現われたコミュニケーション密度の違いが、こうした「理解度」に関する両親の評価の違いになって表われていると言えよう。何か親に相談しなければならぬことが生じた時、若者は父親ではなく、母親に相談を持ちかけることになる。

「こわい」、「うるさい」、「うっとうしい」というマイナスイメージの項目に関してみると、「こわい」と「うっとうしい」は「そう思う」人が1/4以下しかおらず、認知度が低い。が、「うるさい」という点については、半分近くの学生が「そう思う」と答えており、母親の口うるささ、干渉のしすぎという印象が小さくないことを思わせる。「家族思いで、自分のことも結構理解してくれているが、ちょっと干渉のしすぎで口うるさい」といったところが、学生たちに広く持たれている母親のイメージであろう。

次に、性別によって両親の評価がどのように異なるかを見てみよう(表2参照)。「仕事熱心」という項目に関しては、男女とも父親をやや高く評価しているが、大きな差はない。逆に「家族思い」という項目に関しては、男女ともに母親の評価がかなり高く、特に女子の母親評価の高さが目につく。「頼りがいがある」という項目に関しては、男子では父親が高く評価されているが、

4) 実際、「うるさい」、「うっとうしい」という項目は、「尊敬」と逆相関しているが、「こわい」という項目は順相関している。

5) 「仕事熱心」と「家族思い」という2つの項目に関して、そう思うか思わないかでそれぞれ2グループに分けて、これをクロスすると、「両立派」(仕事熱心で家族思い)、「仕事派」(仕事熱心だが家族思いではない)、「家庭派」(仕事熱心ではないが家族思い)、「ダメおやじ派」(仕事熱心でもないし家族思いでもない)の4つのグループができる。このうち特に「仕事派」の父親と「家庭派」の父親だけを取り出して、その評価を比べてみると、「頼りがい」、「尊敬」、「理解度」のいずれにおいても、「家庭派」の父親の方が「仕事派」の父親より、評価が有意に高いという結果が出た。

表2 性別両親評価

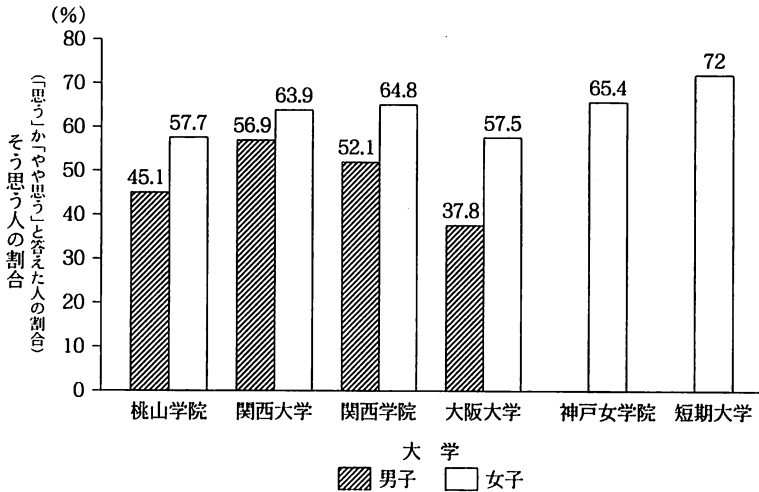
	(男 子)		(女 子)	
	父 親	母 親	父 親	母 親
仕事（または家事）に熱心	2.37	2.32	2.42	2.40
家族思い（やさしい）	1.98	2.29	2.11	2.45
頼りがいがある	1.97	1.82	2.07	2.16
尊敬できる	1.99	1.90	2.01	2.16
自分を理解してくれている	1.63	1.80	1.55	2.01
こわい	1.08	0.87	1.07	1.01
うるさい	1.12	1.56	1.33	1.47
うっとうしい	0.94	1.08	1.08	0.89

女子においては母親の方が頼りになる存在と認知されている。同性の親の方が頼りになるというのはなるほど納得のゆく結果だとも言えるが、「一家の大黒柱」的な考え方からすれば、男女を問わず父親の方が母親より頼りになる存在という回答が出てきてもよい項目である。そうはならなかったということは、改めてそうした伝統的父親像の弱体化を示していると言えよう。「尊敬できる」という項目に関しても、「頼りがい」と同様、男子は父親を、女子は母親をより高く評価している。「尊敬できる」という評価には、自分の生き方の目標になるという意識がかなり含まれると考えられるので、同性の親に対しての方が高くなるのだろう。「自分を理解してくれている」という項目に関しては、男女ともに母親の方を高く評価しているが、父母間の格差は特に女子において大きい。これは女子の父親評価がかなり低いことに起因する。総じて女子は男子よりも両親の評価が高いのだが、プラスイメージ評価をたずねた項目中、唯一この「父親の理解度」だけが、女子の評価が男子の評価より低い。それだけ父娘のギャップは大きいということなのだろう。

「こわい」という印象は、父親に関してはほとんど男女差がないが、母親に関しては男子の得点が低く、大学生の息子たちにとってはや母親はこわい存在ではなくなっていることを示している。「うるさい」という印象は男女ともに母親に強く感じているようだが、特に男子において、母親の干渉はかなりうるさいものと感じられている。父親は娘には多少うるさいことを言っても、息子に対してはほとんどうるさいことは言わないので、息子たちは父親をあまりうるさいとは感じない。このため、父母間格差は男子において大きくなっている。「うっとうしい」という印象は、男女間で父母の評価が逆転している。男子ではやや母親が、女子ではやや父親が「うっとうしい」と感じられている。男子の場合は、「うるさい」と近い感覚で、愛情を押しつけてくる母親をやや「うっとうしい」と感じるのであり、女子の場合は、若い女性の生活感覚と合致しない「おじさん感覚」が、少なからず父親を「うっとうしい」存在に感じさせているのではないだろうか。

以上、個別の項目に関して両親の評価を見てきたが、総合的に見て若者たちが親をどう評価し

図1 親のようになりたいか(Q8)



ているかを「将来、自分の父(母)親のようになりたいか」という問いに対する回答から捉えたい。図1を見てわかるとおり、明らかに女子の方が男子より親のようになりたいと答えるものが多い。もちろん、この回答は、親がどの程度立派な人間かを示しているのではなく、あくまでも若者自身の親の見方を示しているものである。それゆえ、女子の比率が高いからといって、母親が父親より立派だということにはならない。当然ながら男女を問わず、親を尊敬できると思う人は、親のようになりたいと思う割合が圧倒的に高い。父親を非常に尊敬できるという男子学生の87.9%、母親を非常に尊敬できるという女子学生の91.1%が、親のようになりたいと答えている。では、その親のようになりたいというのは、いったいどのような価値観を継承したいということなのだろうか。これを知るために「親のようになりたい」という意識と様々な価値観とのクロスをとって見たところ、ジェンダーに関わる意識との間に強い関連が見られた⁶⁾。

表3に見られるとおり、男子では、父親のようになりたいと思っている者は、そうでない者と比べ、「男らしさ」を肯定的に受け止め、結婚の際には女性が改姓することを望む意識が高く、既婚女性がずっと仕事を持ち続けることに対しては否定的意識をもつ者が多い。とはいっても、強固な男性優位主義者ではなく、現状では女性が改姓した方がいいのではないかと、仕事も結婚したらすぐやめるのではなく、子どもができれば家庭に入ってほしいという程度の消極的な男性優位主

6) 他には、体制批判に関する項目との間に関連が見られ、親のようになりたいと思うものほど体制肯定的であり、思わないものほど批判的である。例えば、天皇制や自衛隊を無くした方がいいという意見が、親のようになりたくないという人に有意に多い。この関連は、子どもが目標とできないような親に育てられたから反体制的になったというより、既成の権威を否定する価値観の持ち主は、社会的には体制に反発し、家族内では親——特に父親——の権威を否定したがるということだろう。既成の権威を否定したがる傾向は、自分の能力に自信のある学生に典型的に見られる傾向であり、伝統的な若者の革新性のひとつの顕われである。本調査の場合、大阪大学にこのタイプの学生が比較的多い。

表3 親評価とジェンダー観

単位：%

	(男)		(女)	
	父親のようになりた いかわ そう思 わない ***	母親を尊敬 でき る **	母親のようになり たいか そう思 わない ***	父親を尊敬 でき る ***
(男(女)らしいは嬉しいか) (Q17)				
1. はい	57.6	49.2	47.2	44.6
2. 一概に言えない	42.4	41.1	48.6	50.6
3. いいえ	0.0	9.7	4.1	4.8
(男(女)らしさは必要か) (Q18)				
1. 絶対必要	31.4	25.8	18.3	16.3
2. どちらかといえば必要	59.3	54.8	66.2	66.3
3. どちらかといえば必要ない	8.5	12.9	13.2	15.1
4. まったく必要ではない	0.8	6.5	2.3	2.4
(改姓) (Q19)				
1. 当然妻が名字を改めるべきだ	17.0	11.3	11.4	10.3
2. 現状では妻が名字を改めた方がよい	48.3	28.2	37.9	34.5
3. どちらが名字を改めてもよい	23.7	40.3	41.1	44.8
4. 夫と妻は別々の名字のままよい	11.0	20.2	9.6	10.3
(女性の仕事) (Q20)				
1. 結婚したら家庭に専念した方がよい	19.0	15.0	14.7	12.8
2. 子どもができたら、家庭に専念	52.6	38.3	41.7	37.2
3. できるだけ職業を持ち続ける	28.5	46.7	43.6	50.0
(家事・育児) (Q21)				
1. 妻がやった方がよい	6.8	6.5	4.6	4.4
2. 夫もできるだけ協力すべき	77.8	72.6	76.3	69.0
3. 公平に分担すべき	15.4	21.0	19.2	26.6
(生まれ変わり) (Q15)				
1. 男性	89.7	85.2	36.5	36.8
2. 女性	10.3	14.8	63.5	63.2

(カイ二乗検定 ***...p<0.01 **...p<0.05 *...p<0.10)

義である。当然、家事・育児も公平分担は困るけれど、ある程度は手伝うといった意識の持主である。女子の場合もほぼ似たような傾向を示し、母親のようになりたいと思う者は、従来の性別役割分業に肯定的で、仕事に関しても、家事・育児に関しても家庭中心の考えをする者が相対的に多い。現在の学生たちの親の世代では、フルタイムで働き続けてきた母親はそう多くはなく、性別役割分業が守られている家庭がほとんどである。そうした役割分業を担っている親たちのようになりたいということは、やはり性別役割分業に肯定的になりやすいということなのだろう。

異性の親に対する評価がジェンダー観にどう関わるかを見るために、尊敬できるかどうかという評価項目との関連を見てみた(表3参照)。それなりに、親の評価が高い方が伝統的性別役割に対して肯定的だという結果は出ているが、親のようになりたいという意識ほどには強い関連が出ていない。やはりジェンダー観に関しては、同性の親に対する評価との関連が強いと言えよう。

ジェンダーに関する意識では、同性の親の評価が大きな役割を果たしていたが、全人格的関わりにおいては男女とも母親の影響力のはるかに強いと思わせるデータがある。そのひとつは、将来の親との同居希望の有無である。たとえば、全体では3割強しか同居希望はないのに、母親のことを「非常に尊敬できる」、あるいは「非常に理解度が高い」と思っている学生の場合、半数以上が将来親と同居したいと答えている。父親の評価が高くて、これほどには同居希望者は多くない⁷⁾。これは、男女とも将来の親との同居として、暗黙の内に母親との同居を念頭に置いていることの表われであろう。男女別でみると、男子では、母親評価に関する4項目(「尊敬」、「理解」、「頼りがい」、「うっとうしさ」)が、10%以下の危険率で将来の同居希望との間に関連を示すが、父親に関しては有意な関連を示す項目はない。総じて、女子より同居希望と親評価との関連は弱く、男子の場合、同居希望というのは積極的選択というより、長男役割を意識しての消極的選択なのではないかと考えられる。これに対し、女子の場合は、10%以下の危険率で有意な関連を示さないものが、父母双方の「こわい」、「うるさい」という項目だけで、他の項目はすべて同居希望との間に有意な関連を示す。女子の場合は、かなり積極的に自分の親との同居を望まなければ、将来は夫の親と同居する可能性が高い。そうした流れに逆らってまで、同居したくなる親なのかどうかは、まさに親の評価が大きく関わってくる。消極的選択として親との同居を考える男子と、積極的選択として親との同居を考える女子との違いが明確に表われていると言えよう。

母親の影響力の大きさは、「早く親から自立したい」という意識にも反映している。「早く親から自立したい」と考えている人は、76.1%もいるが、他方で「早く社会に出て働きたい」と考えている人は、26.5%しかいない。「親からの自立=経済的自立」という公式は成立たない。この自立意識を親評価項目との関連で見ると、その意味するところは明瞭になる。父親に関しては、「うっとうしい」という項目だけが危険率10%以下で関連を示すにすぎないのに、母親に関

7) ちなみに、父親を「非常に尊敬できる」と思う人の同居希望率は41.0%で、「非常に理解度が高い」と思う人の同居希望率は45.6%である。

しては、「うっとうしい」、「理解度」、「頼りがい」、「尊敬」、「うるさい」の5項目が関連を示す。すなわち、この「早く親から自立したい」という意識は、「愛」という名の下に管理を押しつけてくる母親からの自立希望を意味すると言えよう。それゆえ自立といっても、決して本格的な独立を意味するものではなく、「経済的にはスネかじりでいたい、ちょっと親から離れて暮してみたい」といった程度のもと考えられる。

もうひとつ親との関係で見ておきたいのは、「両親の期待どおりに育っているか」という若者の自己評価である。これは、全体ではほぼ半々に分れたが、男女別では女子の方が自己評価が高い。しかし、この回答にもっとも大きな影響を与えているのは大学差で、偏差値の高い、いわゆる良い大学の学生の方が、自己評価が高い。若者たちは、自分に対する親の期待が良い大学へ入ることにあつたと考えている。特にこの考えは男子に強く、完全に偏差値と比例するが、女子の場合は、男子ほど学歴で判断を下されることが少ないためか、男子ほど大学差が大きくは表われていない。

2. 男女観

男女関係のあり方に関する考え方については、前節の親評価との関連でも見てきたが、ここで

表4 男女観に関する意識の変化（87年—92年） 実数（%）

(改 姓) (Q19)	前回(87)調査	今回(92)調査
1. 当然妻が名字を改めるべきだ	95(17.3)	66(11.3)
2. 現状では妻が名字を改めた方がよい	189(34.4)	214(36.6)
3. どちらが名字を改めてもよい	217(39.5)	226(38.6)
4. 夫と妻は別々の名字のままでもよい	48(8.7)	78(13.3)
DK. NA.	1(0.2)	1(0.2)
(女性の仕事) (Q20)		
1. 結婚したら家庭に専念した方がよい	133(24.2)	79(13.5)
2. 子どもができたなら、家庭に専念	199(36.2)	242(41.4)
3. できるだけ職業をもち続ける	209(38.0)	256(43.8)
DK. NA.	9(1.6)	8(1.4)
(家事・育児) (Q21)		
1. 妻がやった方がよい	調	30(5.1)
2. 夫もできるだけ協力すべき	査	418(71.5)
3. 公平に分担すべき	せ	136(23.2)
DK. NA.	ず	1(0.2)
(性交渉) (Q22)		
1. 結婚式がすむまではすべきではない	82(14.9)	27(4.6)
2. 結婚の約束をしていればよい	79(14.4)	53(9.1)
3. 深く愛し合っていればよい	320(58.2)	415(70.9)
4. 結婚とか愛とかは関係ない	63(11.5)	83(14.2)
DK. NA.	6(1.1)	7(1.2)

は前回調査との比較を中心に述べていこう(表4参照)。結婚の際の改姓に関しては、「当然妻が名字を改めるべきだ」という意見が減り、「別姓のままでいい」という意見が増えている。女性の仕事については、「結婚したら家庭専念」という考えが減り、「出産退職」あるいは「ずっと仕事をした方がよい」という考えが増加している。また、性交渉に関しては、「結婚式が済むまではだめ」、あるいは「結婚の約束をしていなければだめ」という考えが減り、「愛し合っていればよい」という考えが増えてきている。こうした変化は、前回の調査時点ですでに確認されていた方向がさらに進んできたものである。今回新たに入れた家事・育児の分担についても、「妻がやった方がいい」という意見は5%しかなく、「夫もできるだけ協力すべきだ」という意見が7割を超える、「公平分担」も1/4近くいる。こうした変化は男女平等化志向の拡大と捉えることができる⁸⁾。

しかし、変化の方向性は確かだとしても、現状で十分な男女平等化志向が浸透しているかと言えば、まだまだと言わざるをえない。姓の変更でも、妻が変えることを望む意見(「当然変えるべき」+「変えたほうがいい」)は半数に近いし、仕事に関しても、女性はいずれやめて家庭に入った方がいいという意見(「結婚退職」+「出産退職」)は半数を超える。家事・育児の分担に関しても、7割を超えている「夫もできるだけ協力すべきだ」という意見は、裏を返せば妻が中心になって家事・育児を行なうべきだという意味でもあるのだから、十分な平等化志向が浸透しているとはとうてい言いがたいだろう。

これと関連してくることだが、学生たちは、「男らしさ」や「女らしさ」といったジェンダー規定に対して、決して否定的ではない。個人的に「男らしい」とか「女らしい」と言われた時に、素直に嬉しいと思う人は、男子の52.8%、女子の39.9%程度だが、一般的必要性ということで問われれば、男女とも8割以上の人が必要であると回答している。こうした「らしさ」役割のひとつである、デートの際に男性が金銭的負担を多目にするについて問うたところ、平均で男性は約6割の負担をすべきだという結果が出た。女子の半数以上は、割り勘で構わないと考えているのに、男子の半数以上は6割以上男性が負担すべきだと考えており、男子は女子が期待している以上にこの男性役割を果そうとしていることがわかる。もちろん、女子学生の中でも考え方に違いがあり、短期大の学生や女子大の学生は、男子並みあるいは男子以上に、男性が金銭的負担をしてくれることを期待している。彼女たちは、「女らしさ」に対する受け止め方も、共学大学の女子学生に比べると、はるかに肯定的であり、伝統的な性別役割そのものに肯定的な立場に立っているとさえ言う。(図2～図7参照)

こうした女子大や短大の女子学生と共学大学の女子学生との意識の相違は多くの点で見られるが、もっとも端的な形で現われるのがこの男女観——特に女性の生き方についての考え方——である。こうした相違は、大学入学後に拡大される面もあるだろうが、基本的には大学入学時点ですでにできあがっているものと考えられる。というより、こうした男女観に基づいて進学先——

8) 今回の調査では、回答者に女子が前回より多く入っているので、その影響力を考慮しなければならないが、男子だけで見ても、こうした変化は進んでいる。

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

図2 デート費用の負担（Q16）

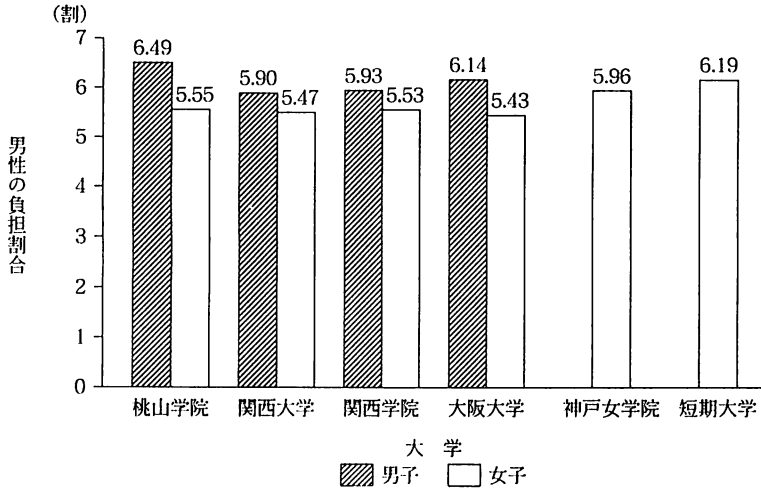
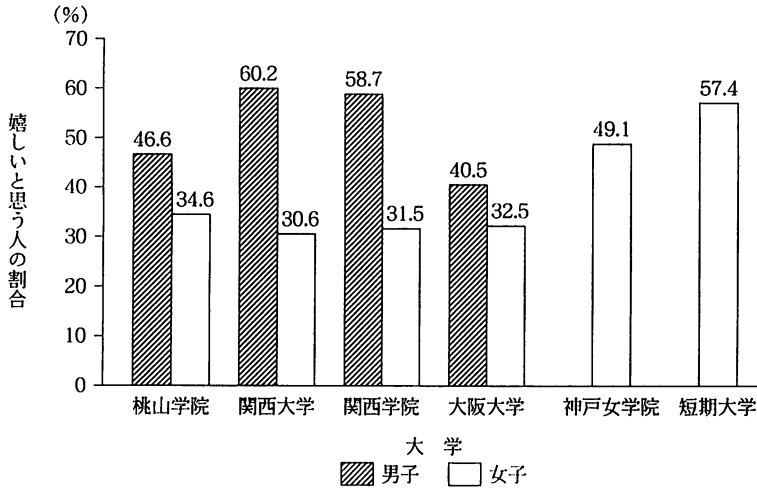


図3 男(女)らしいと言われたら嬉しいか（Q17）



共学にするか、女子大にするか、短大にするか——が決定されているとみるべきだろう。もちろん、進学先の決定には成績という要素が重要だが、漠然としたものであっても女性としてどういう生き方をしたいと考えているかも、非常に重要な要素になっている。短大なら、卒業後4～5年働いて、結婚退職あるいは出産退職し、その後は家庭の主婦として人生を送っていくというコースがかなり確固としたものとしてあり、短大を進学先に選ぶということは、単に学校を選ぶということ以上にこうした人生のコースを選ぶという意味を持っていることになる。それゆえ、短大生には伝統的性別役割を肯定的に受け止める者が多いのである。4年制女子大は、短大

図4 男(女)らしさは必要か(Q18)

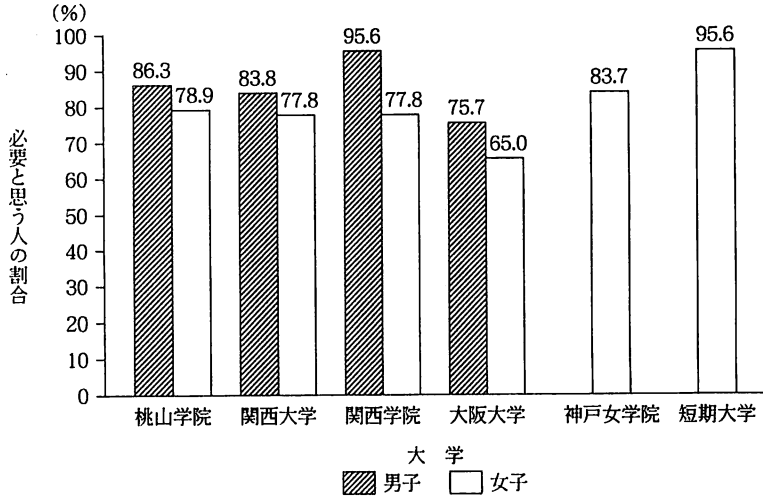
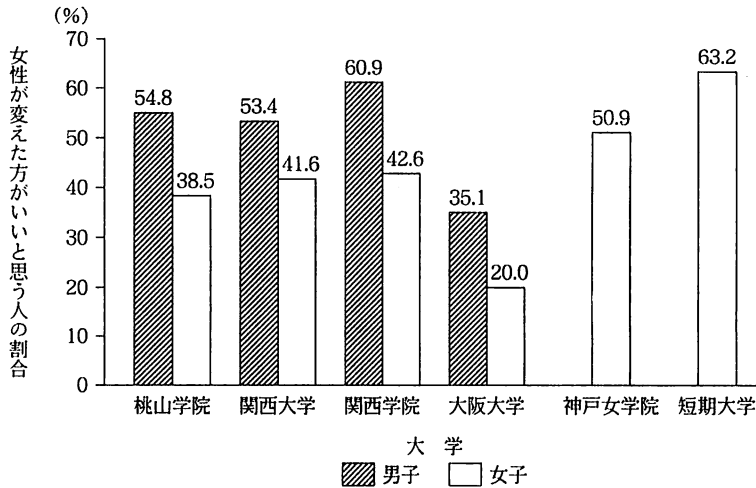


図5 結婚の際の姓の変更(Q19)



よりは多様なコースが考えられるが、それでも男性をライバルとして対等に競争していこうという考え方を持つ者が選ぶところではなく、男女の役割の違いを大きく考える傾向のある女子が集まる。共学の場合には、もっとも多様な可能性を考えることができるため、多様な価値観の持ち主が集まることになる。多数を占めるわけではないが、伝統的性別役割を否定する女子が短大や女子大に比べ、はるかにたくさん存在するのは当然だろう。共学大学の内部では、この問題のポイントをどの程度認識しているかと、自分の能力にどの程度自信を持っているかによって、意識が異なる。問題をよく認知し、自分の能力は男子に劣るものではないと考えるものほど、伝統的

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

図6 女性の仕事（Q20）

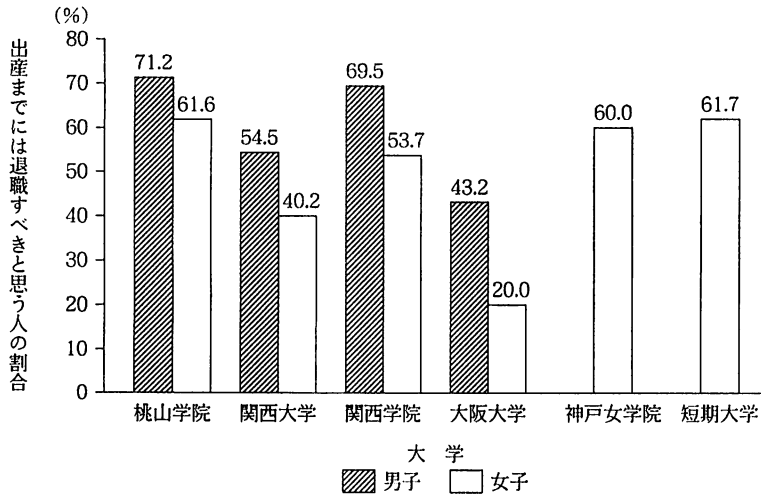
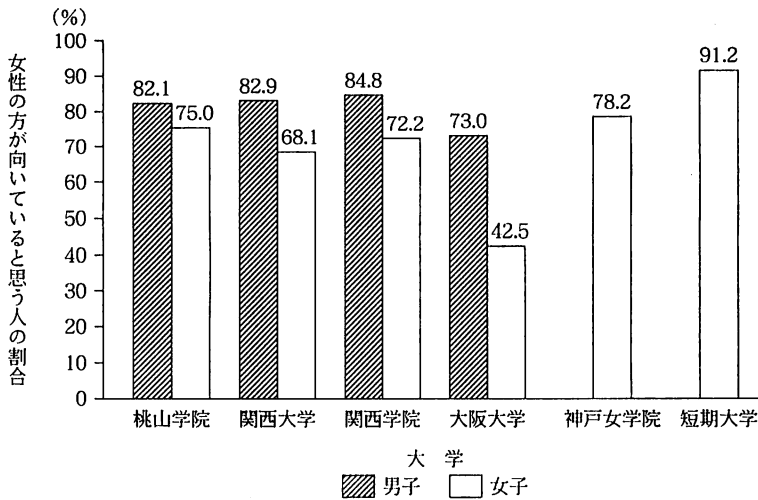


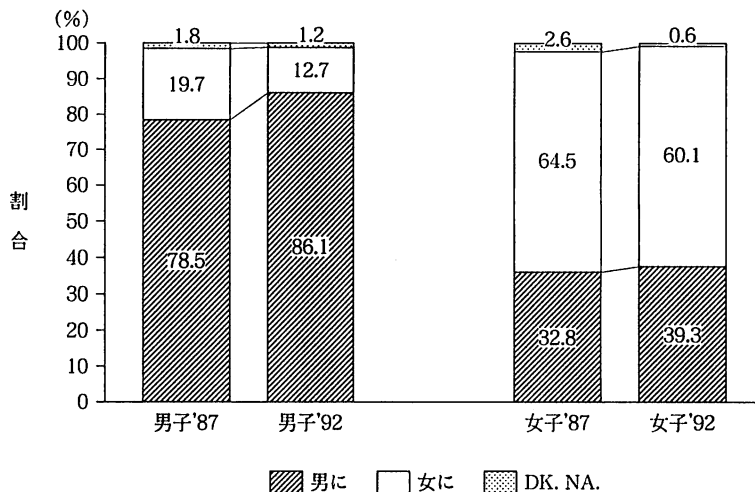
図7 家事・育児の分担（Q21）



な男女観に否定的である。今回の調査では、大阪大学の女子学生たちがこうした意識をもっともよく代表している。

前回の調査の際に、もっとも予想外で驚かされた結果は、男子学生の約2割が次に生まれ変わる時には、女性がよいと回答したことだった。しかし、女性の社会的地位が高くなりつつある変化の方向性から言えば、こうした考えが増えるのも当然と言えば当然なので、今回もこの傾向はますます強まっているのではないかと予想していたのだが、現実には男女ともに女性志向が減り、男性志向へ戻った（図8参照）。

図8 生まれ変わり希望 (87年-92年)



やはり、まだまだ女性の方が損であるという意識は根強いようだ。特に、前回の調査の頃は、「雇用機会均等法」が施行されてから間もなく、まだその運用上の問題点は広く知られておらず、もっぱら女性にも職業上の機会が均等に開かれたということだけが強調されており、女性の未来は明るいというイメージが漂っていた時期だった。これに対し、それから5年たった今回の調査時点においては、雇用機会均等法があっても現実には職場における女性の地位改善は遅々として進まないことが広く知られるようになっており、やはり男性の方が得だという意識を再び増やすのに少なからぬ影響を与えたと考えられる。ただ前回調査よりは減ったものの、まだ13%近くの男子学生が女性として生まれ変わりたいと考えているのは、かつての「国民性調査」⁹⁾などから見れば、決して無視できるほどの小さな数字ではないことは指摘しておきたい。

3. 友人観と群れ感覚

ここまで若者の親子間、異性間の関係とその意識を見てきたが、それでは同性の友人に対してはどのような考え方を持って、どのような関係を作り上げているのだろうか。最近の若者はよく、ノリの良さ、明るさを重視した浅く広い交遊関係を持ち、特に目的がなくとも群れたがるように言われている¹⁰⁾が、実際にそうなのだろうか。

親友と呼べる友人が何人ぐらいいるかと尋ねたところ、全体の平均で5.04人という数字が出て

9) 若い男性で女に生まれ変わりたいと考える者は、以前は大体6%程度だった。統計数理研究所国民性調査委員会『第4 日本人の国民性』至誠堂、1982年、402頁を参照せよ。

10) たとえば、実証データに基づいてこうしたことを述べているものとして、千石保『まじめの崩壊——平成日本の若者たち』サイマル出版会、1991年があげられる。

きた。これを多いとみるかどうかは親友の定義によるだろう。すべてを打明けられる友人という、昔ながらの親友イメージにこだわるなら、多すぎることになるだろうが、そのように考えるよりも、むしろ今や若者にとっての親友とは、20歳前後で5人ぐらいいる存在となったと考えたほうがいだろう。しかし、この5人の中には、今は頻繁に会っているわけではないが、小学校、中学校をともに過した幼なじみや高校の時に親しかった友人数の内に入っていると考えられる¹¹⁾ので、そう考えれば、5人という数もそれほど多いものとも言えないかもしれない。生まれ育った近隣集団が学びの集団にもなり、労働の集団にもなったような時代においては、親友数も当然少ないだろうが、現代のように多数の集団に所属するのが当たり前となった時代においては、極端な場合には所属する集団ごとに親友がいてもおかしくない。昔でも、近隣集団を出て、高等学校を経て、大学に進学したものなら、やはり親友数はある程度多かったのではないだろうか。

いずれにしろ、ある程度の人数になった親友とは、学生にとってどんな存在として意識されているのだろうか。よく言われるように、浅いつきあいなのだろうか。親友の考え方や行動がまちがっていると思った時には忠告すると回答した人は6割以上おり、少なくとも当たり障りのない話だけをする友人とは異なる存在として意識している人が多いことになる。しかし、これも従来親友イメージから言えば、4割近くも忠告しないという回答をした人がいることの方が興味深い結果かもしれない。親友と恋人との約束が重なった場合には、6割以上の人が恋人を優先すると答えており¹²⁾、多くの学生にとって、親友は恋人以上に大切な他者というまでにはなっていない。当たり前のことかもしれないが、ただの友人よりは親しく、恋人ほどには親しくないというところに親友は位置するようだ。特に興味深いのは、どちらの問いにおいても、女子の方が男子より親友を重視する回答をしている点である（親友に忠告：男子57.0%、女子65.1%）（恋人より親友を優先：男子26.2%、女子37.0%）。より深いコミュニケーションを親友との間に求めているのは女子の方だと言えよう。親友数自体は女子の方が少ない（男子5.42人、女子4.75人）ことを考え合わせれば、相対的に男子の方がいわゆる「広く、浅い」コミュニケーションをしていることになる。今や、かつて言われていた「男は友情に厚く、女は愛に生きる」に代わって、「女は友情に厚く、男は愛に生きる」と言うべきなのかもしれない。

次に、好む友人の性質から友人観を探ってみたい。表5に見られるように、「思いやりのある」がもっとも重要な性質と考えられている。半数以上の人がこの項目を選んでおり、友人関係においても、やさしさを第一に求めていることがわかる。次に、大事だと考えられたのは「明るい」という性質である。この「明るい」という性質は、「ユーモアがある」、「ノリのよい」

11) パイロット調査で、親友数を4～5人と答えた学生に聞いてみたところ、こぞってこうした友人関係を語ってくれた。

12) もちろん、現実生活においては「先約主義」——先に約束した方を優先する考え方——をとり、約束は重ならないようにしている人が多いと思われるが、あえて二者択一で回答してもらった。

表5 好む友人の性質 実数(%)

	男子	女子	計
思いやりのある	103(42.2)	190(55.7)	293(50.1)
明るい	69(28.3)	127(37.2)	196(33.5)
正直な	76(31.2)	118(34.6)	194(33.2)
頼りになる	73(29.9)	103(30.2)	176(30.1)
責任感のある	68(27.9)	72(21.1)	140(23.9)
ユーモアがある	62(25.4)	67(19.7)	129(22.1)
寛大な	32(13.1)	51(15.0)	83(14.2)
知的な	28(11.5)	50(14.7)	78(13.3)
ノリのよい	43(17.6)	34(10.0)	77(13.2)
まじめな	34(13.9)	31(9.1)	65(11.1)
礼儀正しい	36(14.8)	25(7.3)	61(10.4)
元気な	20(8.2)	34(10.0)	54(9.2)
親切な	17(7.0)	26(7.6)	43(7.4)
聞き上手な	10(4.1)	9(2.6)	19(3.2)
男(女)らしい	10(4.1)	3(0.9)	13(2.2)
かっこいい	4(1.6)	3(0.9)	7(1.2)

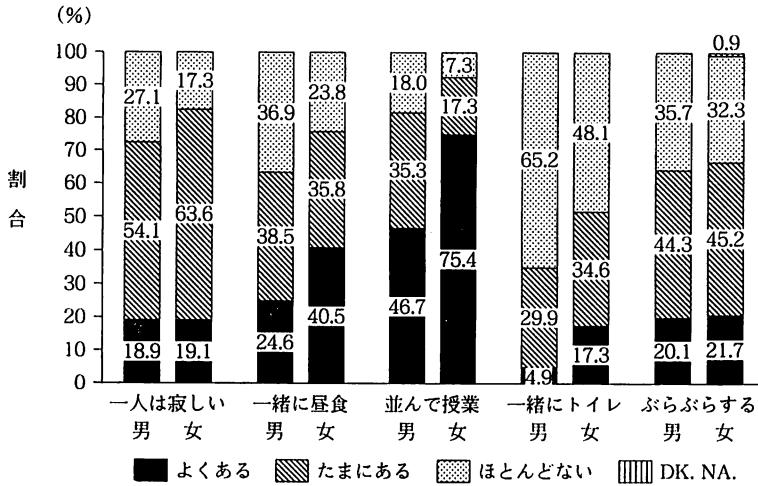
(好む性質を3つ選ぶ回答形式による)

といった性質とともに、現代の若者のもっとも好む友人のタイプと言われる¹³⁾。「明るい」という性質が第2位に入ったことは、この主張を裏付けるものとも思われるが、「ユーモア」や「ノリのよい」という性質よりは、「正直な」、「頼りになる」、「責任感のある」といったまじめな性質の方が上位にランクされており、言われているほど、「ノリのよさ」や「明るさ」が重視されているとは言えないだろう。総じて、「ユーモア」や「ノリ」は男子の方が重視している割合が高いのだが、短期大学の女子学生の場合は男子並みあるいはそれ以上にこれらの性質の重視度が高く(ユーモア26.5%、ノリ20.6%)、他の女子学生との違いが際立っている。また、大阪大学の学生の場合、全体で33.5%の人が好む友人の性質とした「明るい」という項目が、男女とも2割以下しか重視するものがないことや、「ノリのよさ」に対する評価が低い点(6.5%)などに、他の大学の学生との友人観の違いが表われている。

次に、若者の群れ感覚について見てみよう。これを測るために、今回の調査では5つの質問を用意した(図9参照)。このうち、「授業の時、友人と並んで座る」ことや「昼食時に、友人を探して一緒に食べに行く」ことなどは、学生なら当然よく行なう行動であろうが、「特別な目的もなく友人とぶらぶらする」とか「一人でいるのが寂しいと思う」という人もかなり多い。5つの内で唯一、過半数の学生が「ほとんどない」と答えるのは、「友人と一緒にトイレに行く」という行動であるが、この項目にしても、女子だけで見るならば、「ほとんどない」と答える人は半数を切る。やはり一人でいるのを好まない傾向はあると言えよう。しかし、孤立を恐れ、仲間と

13) 実際に、好む友人の性質を因子分析にかけると、もっとも固有値の高い第1因子に関して、この3項目が得点の高いものとして現われる。

図9 群れ感覚（Q13）



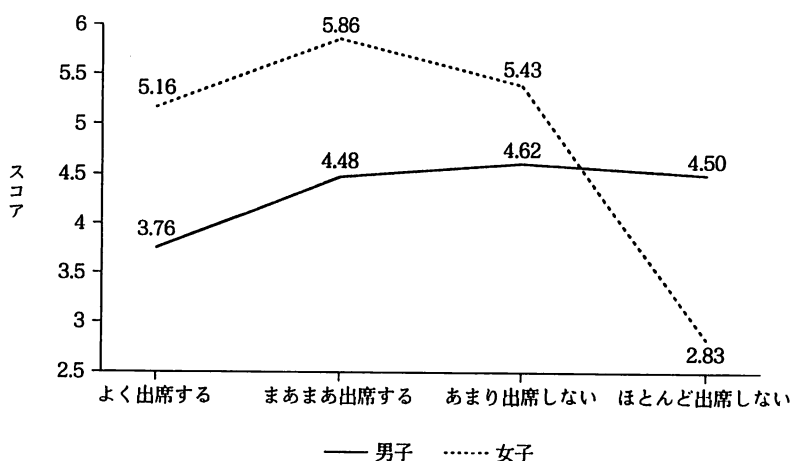
ともにいたいという感情は、高田保馬によって「群居の欲望」としてすでに指摘されている¹⁴⁾ように、時代を越え、世代を越えて、人間にとって普遍的なものなのかもしれない。学生の場合には、行動を制約されることが少ないため、こうした群れ行動をとるチャンスが多く、「若者はよく群れている」という印象を与えるのだろう。しかし、残念ながら今回の調査では、世代間での群れ感覚の違い等については具体的には何も語るができない。この問題は今後の課題として、ここでは性差に注目してみよう。

図9から容易に見て取れるように、群れ感覚は明らかに女子の方が強い。総合的に見るために、5つの質問のそれぞれに対して「よくある」を2点、「たまにある」を1点、「ほとんどない」を0点として、5項目を合計したスコア（最高10点～最低0点）を出してみると、男子の平均得点は4.32であるのに対し、女子は5.46となり、はるかに女子の得点が高い。大学別に見ても、すべての共学大学で女子の得点は男子の得点より有意に高い。なぜ女子の方が群れ感覚が高いのだろうか。まず第一に考えられるのは、女子の方が大学へよく来ているので、キャンパス内の群れ行動として表われやすいもので高い得点を取り、全体としての群れ感覚も高い得点になったという解釈である。確かに、女子の方が授業への出席度がよい（「よく出席する」：男子25.8%、女子43.4%）ので、こうした解釈はある程度説得力を持ちそうである。そこで、出席度別に男女差を見てみる必要があるだろう。

出席度別に性別間で群れ感覚スコアに有意差があるかどうかT検定を試してみたところ、「よく出席する」と「まあまあ出席する」と回答した人たちの中で、有意に女子のスコアが男子のスコアより高くなった。「あまり出席しない」という回答をした人たちでも、有意水準は10%をわず

14) 高田保馬『社会学概論』岩波書店、1922年、49-52頁参照。

図10 出席度別群れスコア



かに超えてしまうが、やはり女子の方がスコアが高い(図10参照)¹⁵⁾。この結果から考えるならば、出席度という要因を省いて、女子の方が群れ感覚が高いことを説明する必要があるだろう。

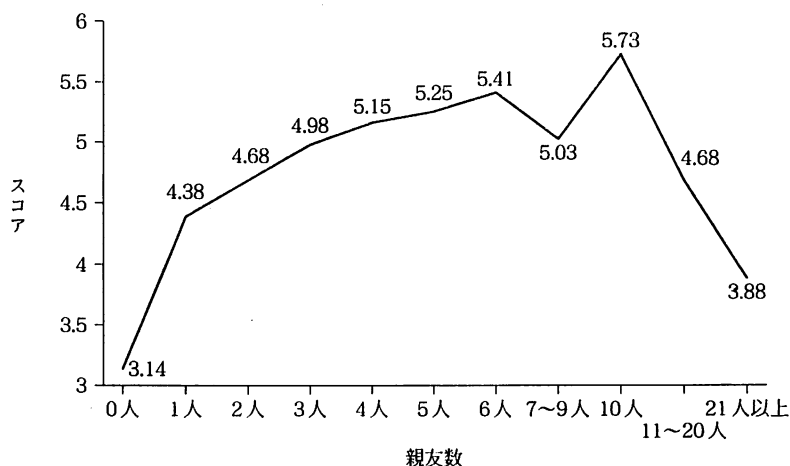
ここで問うた群れ感覚とは、要するに人と一緒にいたがる意識と言い換えることができると思うが、人と一緒にいるには協調精神に富んでいなければならない。群れ感覚が低く、群れ行動を取りたがらない人は、「わが道を行く」タイプの人間で、協調精神はあまり高くないと見られがちである。このことは、自分の努力と才能によって自らの社会的地位を高めていかなければならないと一般に期待される男性の場合には、一概にマイナスに評価されることもないが、女性の場合はそうはいかない。自分自身の社会的地位を高めることよりも、夫を支え内助の功を発揮することが美德と考えられがちな女性にとって、協調精神に欠けると見られることは致命的なマイナスとなる。「変わった女だ」と思われたいためには、同性の友人たちと楽しく過している姿を見せることがもっとも手取り早い方法である。物心がついた頃からだんだんと身につけてきた「女らしさ」の内面化が、こうした群れ感覚の高さになって表われていると言えるのではないだろうか¹⁶⁾。

この群れ感覚スコアを使って、他の問いとの関連を見てみると、なかなか興味深い結果が得られる。まず親友数別に、この群れ感覚スコアを出してみると、当然ながら親友はいないという人のスコアがもっとも低い(3.14)が、親友が多ければ多いほど群れ感覚が高いという結果は出していない。親友数6人まではスコアは上昇するが、7~9人でいったん下がり、10人で最高点

15) 「ほとんど出席しない」という人たちの間では、逆に男子の方が得点が高いが、絶対数が少なく、有意差があるとは言えない。

16) ただし後述のように、こうした伝統的性差にもとづく男女の価値観の違いは、徐々にその差を縮めつつあることを指摘しておきたい。

図11 親友数別群スコア



(5.73)になる。それ以上になると、むしろスコアは大きく減少していく(図11参照)。このスコアの変化から見る限り、親友数11人以上と答えた人の友人とのつきあい方は、親友数が2人以下の人と似ているのではないかと推測される。両者の間にある親友数の大きな違いは親友イメージの違いを表わしていると考えられる¹⁷⁾。

他者との関係性を暗示的あるいは明示的に表わす項目に関して群れ感覚スコアに大きな差が見られる。人生観に関する問い(Q24)で、「人生は闘争だ」と考える人のスコアは4.53なのに対し、「何事もまるくおさめるべきだ」と考える人のスコアは5.20である。四つの生活目標のいずれかを選んでもらった問い(Q25)では、他の三つの選択肢を選んだ人のスコアがいずれも4点台にとどまるのに対し、「身近な人たちとなごやかな毎日を送る」という選択肢を選んだ人のスコアは5.52で断然トップを占める。また、友人たちと何かをする時(Q12)に、「みんなに合わせる」という人のスコアは5.28で、「ひとりでもしたいことをする」という人のスコアは3.83という低い値になる。こうした問いとの関連から、改めてこの「群れ感覚」が同調性(調和志向)と強い関連があるということが確認できるだろう。

4. 人生観と仕事観

群れ感覚の高さによく表われていたように、現代の若者の同調性(調和志向)は高い。友人たちと何かをする時にはみんなに合わせるという人は約8割もいることや、フリーアンサーで回答

17) 実際、親友がまちがっていると思った時に忠告する人も、親友数があまり多くなると減少する。あまりに多数の親友数をあげている人たちの場合、少し仲の良い程度の友人も親友として考えているということだろう。

してもらった「一番大切なものは何か」という質問(Q49)に対しても「自分自身」(22.9%)を抑えて「家族や友人との人間関係」(27.2%)がトップになるのも、こうした同調性(調和志向)の強さを表わしていると言えよう。前回の調査で、「その日その日を、自由楽しく過ごす」(87調査→92調査:30.5%→28.4%)や「しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く」(30.5%→28.9%)といった生活目標とほとんど同率だった「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」(30.9%→34.9%)という目標が、今回の調査で他の2つをやや引き離してトップになったのも調和志向の強まりを表わしていると言えよう。前回も尋ねた人生を闘争と見るか、調和と見るかという「人生観」については、やや減ってはいるものの、前回、今回とも圧倒的に「調和志向」の方が多い(67.5%→65.8%)。男女別では、女子の方がまだ調和志向は強いが、その差は前回より縮まってきている¹⁸⁾(男子:60.9→61.9)(女子:75.1→68.6)。女性の社会進出が進み、家庭と仕事に関する性別役割分業が徐々に崩れていけば、いずれこうした点に関する男女差はなくなるかもしれない。女性はより協調的で男性はより闘争的だという伝統的な性差による性格づけは、単に社会的役割に対応するパーソナリティであったことがだんだんと明らかになってきそうである。「ある程度の収入さえ得られるなら、出世するより気楽な地位にいる方がいい」という考え方を支持する者が、女子(58.7%)より男子(66.0%)に多いことも、こうした伝統的な性差による価値観の相違を考え直させるデータのひとつであろう。現代日本のような安定的で豊かな社会における性のボーダレス化は、闘争的成功志向を減退させ、協調的安定志向を増大させる方向に収斂していくのではないだろうか。

こうした協調的安定志向は、学生たちの仕事観にも当然ながら反映されている。前回調査の際よりはやや増えたものの、「無理な仕事もさせない代りにめんどろみも良くない」ビジネスライクな上司を好む者は相変わらず3割以下しかおらず、大多数の学生は「多少無理な仕事をさせることもあるが、めんどろみの良い」親分肌の上司を好んでいる。徹底した能力主義のイメージのある前者のタイプの上司より、能力以外の人間性も評価してくれそうな後者のタイプの上司の方が多くの学生には好ましく思えるのであろう¹⁹⁾。仕事と余暇のバランスに関しては、「五分五分」という回答を選択するもの(53.8%→57.1%)と「余暇重視派」(27.8%→28.9%)がやや増え、「仕事重視派」(17.5%→13.5%)がやや減っている。全体としては、大きな変化ではないが、大学別に見てみると、時系列比較の可能な3大学において、大阪大学の男子を例外として「余暇重視派」と「仕事重視派」の差がかなり拡大していることが注目される(表6参照)。

「しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く」といった生活目標をもつ者が減ってきている

18) 前回、今回ともに調査をした桃山学院大学、関西大学、大阪大学の3大学を取り出してみても、やはり男女差は縮まってきている。

19) 学歴競争の勝者として、自らの能力に対してある程度自信を持っている大阪大学の学生たちにおいては、ビジネスライクな上司を好む者が半数を超えている。

表6 余暇と仕事（87年—92年）（%）

	桃山男子		桃山女子		関西男子		関西女子		大阪男子		大阪女子	
	87年	92年	87年	92年	87年	92年	87年	92年	87年	92年	87年	92年
余暇重視	33.3	→37.0	7.7	→25.0	27.7	→34.1	17.9	→32.0	38.9	→21.6	19.2	→25.0
仕事重視	23.4	→13.7	10.2	→11.5	21.1	→15.9	14.3	→11.1	19.4	→16.2	15.4	→15.0
差	9.9	→23.3	-2.5	→13.5	6.6	→18.2	3.6	→20.9	19.5	→5.4	3.8	→10.0

ことや、「お金があれば、遊んで暮したい」と考える者が増えてきている²⁰⁾こと、そして「出世するより気楽な地位にいる方がいい」という考え方を持つ者が6割以上いることを考え合わせるならば、今後仕事の上での成功を目標としてそのために努力する者は、ますます減少していくことが確実に予想される。しかし、他方で「将来のために、若い頃の苦勞は買ってでもした方がいい」と思う者が約2/3もいることや、仕事と余暇のバランスも「余暇重視」より「五分五分」という意見を持つ者の方が増えていること、「その日その日を自由に楽しく過ごす」という生活目標をもつ者が減ってきていることを考えるならば、この仕事観の変化は、決して刹那的享楽主義へ収斂していくものではなく、ゆっくりと安定的に仕事と余暇のバランスをとる方向に収斂していくものと考えられる。

「モラトリアム」²¹⁾とか「ピーターパン・シンドローム」²²⁾という言葉で有名になった若者の自立拒否志向については、今回の調査結果からもその微妙な心理が読み取れる。「早く親から自立したい」と思う者は3/4以上おり、「子どものままでいたくはない」という者も半数を超えるが、他方で「早く社会に出て働きたい」と考える者は、わずか1/4強しかいない。この結果から、表面的には若者の自立拒否志向とは、「働く」という形での経済的自立を拒否する志向として捉えられるように思われる。ところが、現実には学生たちは、最終学年に入ると、まるでベルトコンベアーに乗ったかのように、就職活動に東奔西走し、留年をしてまで本気で働くことから逃れようとする者はほとんどおらず、働くことに関するモラトリアムは確実に終わる。つまり、彼らの希望とは逆に、経済的自立が最初に達成される。他方で、「親離れをして、大人になる」という精神的自立の方は、実際にはなかなか確立されないように思われる。かつて精神的自立の決定的な転機になっていた就職や結婚が、現在では必ずしもその機能を十分に果たしていない。就職を

20) この質問項目は前回の調査では入れていなかったもので、総務庁の調査を比較基準とした。それによれば、18—24歳の若者で「遊んで暮したい」と考える者は、1983年は19.8%、1988年は23.6%だったのに対し、今回の私の調査では42.2%という高い割合が出てきた。総務庁青少年対策本部『世界の青年との比較からみた日本の青年』1989年参照。

21) E. H. Erikson, *Identity—Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company, 1968 (岩瀬庸理訳『アイデンティティ——青年と危機』金沢文庫, 1973年)や、小比木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社, 1981年を参照せよ。

22) D. Kiley, *The Peter Pan Syndrome*, Howard Morhaim Literary Agency, 1983 (小比木啓吾訳『ピーターパン・シンドローム』祥伝社, 1984年)参照。

しても、結婚をしても、自立できない若者たちが、社会的にはより大きな問題となっている。その意味では、「働きたくない」と思っている3/4の学生よりも、大学生になっても、ただに「子どものままでいたい」と考えている4割以上の学生や、「親から自立したい」と考えていない1/4弱の学生の方が、自立拒否志向として注目されるべき存在と言えよう。

5. 社会関心と政治意識

社会関心と政治関心については、前回の調査とほとんど同じ質問項目を使っているので、時系列比較を中心に調査結果をみていこう。

まず、新聞記事の読み方に関しては、全体として新聞離れが進んでいることが何よりも注目される(表7参照)。この新聞離れを進めているのは、特に男子学生である。前回調査した共学大学ではすべて男子のスコアが女子を上回っていたのに、今回調査した共学大学では、逆にすべて女子のスコアが男子を上回った。この逆転現象は、女子の社会関心が高くなったことによって起きたのではなく——女子のスコアもあまり高くなってはいない——、ひとえに男子のスコアの低下——すなわち社会関心の低下——によるものである。サンプリングを厳密に行なっているわけではないので、信頼性に問題があるが、前回の調査でもっとも新聞をよく読んでいた大阪大学の男子が、共学大学の男女8グループの中で7番目に落ちたことはやはり象徴的な結果と言わざるをえない。

項目別に見てみると、上位4項目の順位は変わっておらず、スコアもこの4項目だけが1.00を超える点なども前回と同じである。5～7位の項目の中では、地方版と政治外交面の順位が入れ替わっているが、これは地方版がよく読まれるようになったということではなく、政治・外交面への関心が下がったことによるものである。8～12位では、8位になった家庭・婦人欄のスコアの伸びが目立つ。全体にスコアを下げた項目が多い中で、唯一スコアを大きく伸ばしたのがこの項目である。その主たる原因としては、家庭・婦人欄の変質があげられる。かつては、この欄はまさに「家庭婦人」——いわゆる専業主婦——のための記事が掲載される場所であったが、今や変わりつつある男女関係のあり方に関する記事の掲載される欄として、新聞社も力を入れて作っている。こうした欄に若者——特に女子学生——の関心が高くなっていくのは当然と言えよう。家庭・婦人欄と逆にスコアを大きく下げたのが、ラジオ欄と経済面である。前者に関しては、新聞紙面の中での掲載位置の変化の影響が大きいと考えられる。かつてはラジオ欄はテレビ欄とともに、最終面に置かれていたが、衛星放送等の進出によりテレビ欄から切り離され、中程の頁にもっていかれたため、以前ほど読まれなくなったのだろう。経済面に関しては、前回の調査時点がバブル経済のさなかであり、学生も含めて一般大衆が急激に値を上げていく株に興味をもってみつめていた時期だったのに対し、今回の調査時点では、その熱がすっかり冷めていたというのが、このスコアの変化になって表われたと見ることができよう。

表7 新聞記事の読み方（87年—92年）

[87年]	桃山学院大学		関西大学		大阪大学		同志社女子大学		短期大学		全体計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1. テレビ欄	1.87①	1.71①	1.90①	1.74①	1.75①	1.65①	1.75①	1.77①	1.96①	1.85①	1.77①	1.81①
2. 社会記事	1.35③	1.39②	1.53③	1.33②	1.53②	1.58②	1.23②	1.23②	0.84	1.44③	1.23②	1.34②
3. スポーツ記事	1.69②	0.89	1.60②	0.59	1.53②	0.65	0.77	0.77	1.14②	1.63②	0.83	1.25③
4. マンガ	1.11④	1.16③	1.05⑥	1.11③	1.53②	1.50③	1.06④	1.06④	0.92	1.19④	1.10③	1.15④
5. 政治・外交面	0.91	0.97	1.22④	0.89	1.43⑤	1.23⑥	0.86	0.86	0.38	1.12⑤	0.83	0.98
6. 地方版	1.02⑥	0.97	0.81	0.85	0.82	0.85	1.07③	1.07③	0.78	0.92	0.95	0.94
7. 投書	0.75	1.08④	0.92	1.00④	1.03⑥	1.31④	1.00⑤	1.00⑤	0.54	0.86	0.95	0.91
8. ラジオ欄	1.04⑤	0.55	1.07⑤	0.81	0.87	0.85	0.74	0.74	0.92	1.00⑥	0.76	0.89
9. 経済面	0.86	0.57	0.99	0.33	1.00⑦	0.54	0.70	0.70	0.44	0.92	0.57	0.76
10. 社説	0.67	0.63	0.78	0.52	0.90	0.69	0.79	0.79	0.16	0.75	0.60	0.68
11. 家庭婦人欄	0.21	0.95	0.33	0.96	0.55	1.27⑤	0.94	0.94	0.37	0.32	0.87	0.58
12. 小説	0.13	0.26	0.10	0.22	0.15	0.42	0.19	0.19	0.14	0.13	0.22	0.17
平均	0.97④	0.93⑤	1.03③	0.86⑦	1.09①	1.04②	0.93⑤	0.93⑤	0.72⑧	1.01	0.89	0.96
[92年]	桃山学院大学		関西大学		大阪大学		神戸学院大学		短期大学		全体計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
1. テレビ欄	1.85①	1.73①	1.78①	1.86①	1.68①	1.70①	1.65①	1.75①	1.78①	1.79①	1.75①	1.77①
2. 社会記事	1.29③	1.29③	1.30③	1.49②	1.32③	1.35③	1.11②	1.11②	0.95	1.32③	1.25②	1.28②
3. スポーツ記事	1.59②	1.04⑥	1.52②	1.00⑦	1.43②	0.77	0.91	0.91	1.11②	1.53②	1.00④	1.22③
4. マンガ	1.04⑤	1.35②	0.87	1.20③	1.24④	1.38②	0.88	0.88	1.08③	1.03⑤	1.18③	1.11④
5. 地方版	1.10④	1.13④	0.90	0.99	0.59	1.00⑦	0.98	0.98	0.76	0.91	0.97	0.95
6. 政治・外交面	0.90	0.94	1.05④	1.04⑥	1.19⑤	1.03⑥	0.75	0.75	0.63	1.05④	0.85	0.93
7. 投書	0.75	1.13④	0.74	1.08④	0.97	1.18⑤	0.78	0.78	0.69	0.77	0.98	0.89
8. 家庭婦人欄	0.26	0.90	0.29	1.08④	0.49	1.30④	0.84	0.84	0.58	0.33	0.95	0.69
9. 社説	0.53	0.63	0.64	0.77	0.70	0.73	0.64	0.64	0.47	0.64	0.67	0.65
10. 経済面	0.63	0.44	0.66	0.45	0.51	0.48	0.47	0.47	0.44	0.64	0.45	0.53
11. ラジオ欄	0.74	0.31	0.49	0.37	0.49	0.50	0.42	0.42	0.56	0.57	0.44	0.49
12. 小説	0.10	0.15	0.06	0.23	0.11	0.68	0.20	0.20	0.26	0.10	0.28	0.21
平均	0.91⑥	0.93⑤	0.86⑤	0.96②	0.89⑦	1.01①	0.79④	0.79④	0.78⑩	0.89	0.90	0.90

（「必ず読む」を2点、「時々読む」を1点、「ほとんど読まない」を0点として計算した各項目の平均得点。マル数字は順位を表わす。）

表8 1991年の

	桃山学院大学		関西大学		関西学院大学	
	男	女	男	女	男	女
湾岸戦争勃発	18.81①	19.39①	22.20①	20.00①	20.00①	20.20①
ソビエト連邦解体	14.78②	13.27②	15.12②	13.62②	14.67②	16.67②
雲仙普賢岳火砕流発生	5.67③	10.41③	5.12③	8.12③	6.67③	6.47③
宮沢りえヌード写真集発売	3.88⑤	1.43⑦	2.80④	1.88⑦	3.56⑤	3.33④
地球温暖化現象	4.78④	3.06④	2.32⑥	3.33④	4.44④	1.57⑦
従軍慰安婦問題	1.64⑧	2.04⑤	1.46⑧	3.04⑤	1.33⑦	2.74⑤
若貴ブーム	2.39⑥	1.43⑦	1.83⑦	1.16⑧	0.44	0.78
明治大学替え玉入試事件	0.90⑩	2.04⑤	2.80④	0.29	1.33⑦	2.35⑥
四大証券損失補填発覚	0.90⑩	1.43⑦	1.22⑨	2.32⑥	2.00⑥	0.59
広島橋げた落下事故	1.94⑦	0.61	0.61	0.29	0.89	0.98⑨
信楽高原鉄道列車衝突事故	0.75	0.82	1.10	1.16⑧	1.11⑩	0.98⑨
「幸福の科学」講談社に抗議	0.60	0.61	0.85	1.01	1.33⑦	0.59
トレンディードラマ・ブーム	0.45	0.00	1.22⑨	0.29	0.44	0.59
東海大学ガン患者安楽死事件	0.45	1.22⑩	0.73	0.43	0.44	1.18⑧
紀子妃女兒出産	1.04⑨	0.20	0.12	1.01	0.00	0.00
イトマン事件	0.45	1.22⑩	0.37	0.43	1.11⑩	0.78
宮沢内閣発足	0.15	0.00	0.61	0.43	0.00	0.20
育児休業法成立	0.00	0.82	0.00	1.16⑧	0.22	0.00
政治改革関連三法案廃案	0.45	0.00	0.37	0.00	0.00	0.00

(数値は、1位をつけたものを30点、2位をつけたものを20点、3位をつけたものを10点として)

前回の調査で大学差を中心として非常に興味深い結果を導き出した個別のニュースに対する関心は、今回の場合、「湾岸戦争勃発」、「ソビエト連邦解体」、「雲仙普賢岳火砕流発生」の3つのニュースのインパクトが強すぎたため、印象の強いニュースを3つ選んでもらうという回答形式では、他のニュースに対する関心度が正確に測れずに終わってしまった(表8参照)。上位の3つはその社会的影響力からいっても当然上位にランクされるニュースだと思うが、テレビというメディアを通して、印象の強く残る映像が何日も流されたことも少なくない影響を与えているように思われる。

次に、政治意識についてみていこう。新聞記事の読み方で、政治・外交面のスコアが落ち、重大ニュースでも、政治関連のニュースはほとんど最低のスコアしか取れないことを見るならば、現代の学生たちの政治関心が低いのは明らかである。しかし、たとえ低くても、低いなりにどのような政治意識なのかをつかむことはできる。まず政党支持に関してだが、もっとも増加したのは支持なし層である(表9参照)。単純に支持をたずねた場合には、3/4以上が支持なしと答え、しいて支持できそうな政党をあげてもらっても、約1/3が支持なしと答えている。特に、新聞をよく読み、投票意欲も高い大阪大学や関西大学の女子学生の支持なしの比率がそれぞれ40.0%、34.7%もあることを考えると、この支持なし層とは、単なる政治的無関心層ではなく、学生たちの政党に対する期待感の喪失と見ざるをえない。こうした状況の中で、一応、前回、今回とも自

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

重大ニュース

大阪大学		神戸女学院大学	短期大学	全 体		
男	女			男	女	計
20.00①	22.29①	20.19①	17.19①	20.44①	19.71①	20.02①
17.06②	13.14②	14.23②	7.19④	15.22②	12.94②	13.90②
3.82③	4.00③	6.92③	9.47②	5.39③	7.80③	6.78③
1.76⑦	2.00⑨	2.12④	7.89③	3.11⑤	3.19④	3.16④
0.88	1.14⑩	2.12④	2.28⑦	3.25④	2.36⑤	2.74⑤
1.76⑦	2.29⑤	1.92⑦	0.35	1.54⑧	2.08⑥	1.85⑥
0.59	1.14⑩	2.12④	4.39⑤	1.54⑧	1.88⑦	1.74⑦
0.88	1.14⑩	1.73⑨	1.58⑧	1.67⑥	1.47⑧	1.55⑧
2.94④	0.86	1.73⑨	0.88	1.54⑧	1.37⑨	1.44⑨
2.94④	2.29⑤	1.15	0.53	1.40⑦	0.86	1.09⑩
1.18⑩	2.29⑤	0.58	0.53	1.01	0.99	1.00
2.35⑥	2.29⑤	0.00	1.23⑩	1.10	0.89	0.98
1.47⑨	0.29	1.35	2.98⑥	0.88	0.96	0.92
0.59	2.57④	0.96	0.70	0.57	1.05⑩	0.85
0.00	0.29	1.92⑦	1.40⑨	0.35	0.86	0.65
0.29	0.57	0.19	0.53	0.53	0.61	0.57
0.88	0.00	0.77	0.88	0.39	0.42	0.41
0.00	0.57	0.19	0.00	0.04	0.48	0.30
0.59	0.86	0.00	0.35	0.35	0.16	0.24

計算した各項目の平均点。マル数字は順位を表わす。）

民党が相対的にもっとも支持できる政党としてあげられた。前回は、社会党がその差をかなり詰めていたが、今回は社会党の支持率が激減し、大きな差がついた。今回の調査が「佐川急便事件」の真只中で行なわれていたことを考慮に入れるならば、この結果のもつ意味は深刻である。この時点で「日本新党」という新しい政党ができてはいたが、まだ海のものとも山のものともいえず、自民党に取って代りうる野党はないという意識が自民党支持へと向わせていたのだろう。従来も社会党への支持というのは、自民党批判票としての意味がかなり入っていたのだが、今回はその分を日本新党に持っていかれた。前回の調査で非常に少なかった社会党を嫌う人が、今回大きく増えたことは、支持率が落ちたこと以上に社会党にとっては致命的なことかもしれない。前回の調査の際には、土井たか子が委員長になって間がなく、漠然としたものながらも、女性党首という新しいイメージをもつ社会党への期待感が高まっていたのに対し、今回の調査時点では田辺誠といういかにも従来の社会党政治家タイプの委員長に代わっており、土井社会党に持ちえたような新鮮なイメージはすっかり影を潜めていた。PKO問題をめぐって社会党がとった「牛歩戦術」が、テンポの良さを重んじる若者の目にはただひたすらばかばかしい光景に映ったことも、若者の社会党離れを進める一因になったと言えよう。自民党は支持率をやや増したが、それ以上に嫌悪率が増しており、自民党に対する学生の評価も良くなったとは言い難い。日本新党は、この調査時点では、参議院選挙を経験したただけのもっとも新しい政党だったが、ここでも漠然とし

表9 政党の支持率と嫌悪率（87年—92年）（％）

	支持率 a		支持率 b		嫌悪率	
	87年	92年	87年	92年	87年	92年
自 民 党	13.1	13.0	28.7	30.6	30.4	44.1
社 会 党	8.1	2.6	23.6	12.0	8.5	22.2
公 明 党	2.8	0.2	3.8	1.4	23.6	32.6
共 産 党	2.4	2.6	6.4	5.8	37.2	33.2
民 社 党	0.4	0.2	1.3	1.0	9.6	17.4
社 民 連	0.7	0.9	1.5	3.8	5.3	7.9
日 本 新 党		1.9		8.5		6.0
ス 平 和 党		(1.0)		(1.7)		—
そ の 他	0.7	0.2	1.4	0.5	5.3	1.9
な し	69.1	76.9	26.9	32.5	33.5	28.0
DK. NA.	2.5	0.7	6.4	2.2	4.7	0.3

（支持率 a は単純な支持政党。支持率 b はしいてあげてもらった支持を含む政党支持色。嫌悪率は複数回答可で答えてもらっている。
 ス平和党……スポーツ平和党は「その他」に記入されていたものを独立させた項目。嫌いな政党としては名前をあげたものがいなかった。）

た期待感から、自民党、社会党に次いで3番目の支持を受けている。日本新党に関しては、調査したすべての共学大学において女子より男子の方が支持が高く、特に関西学院大学と大阪大学の男子では、2割を超える支持を得ていることが注目される。ちなみに、逆に女子の方が支持率が高い政党は社会党である。これは、前回の総選挙で多数当選した女性議員が、社会党に女性の進出に比較的理解のある党だというイメージを与えているためであろう。

選挙別投票意思に関しては、全体としては、地方選挙に対する関心が低くなり、国政選挙に対する関心が高くなったという結果が出ている²³⁾。参議院選挙が調査の4カ月程前に行なわれていたことや、「佐川急便事件」の余波で長期に渡って自民党を——ひいては日本の政治を——牛耳ってきた田中一竹下派が分裂するなどの動きがあり、国政への関心を高めたのではないかと考えられる。大学別では、前回の調査で他の大学生とかなり異なる高い投票意欲を示していた大阪大学の学生たちの意欲の減退が目につく（大阪大学学生の平均投票意思：76.3%→63.8%）。特に、男子学生にこの変化が大きく表われている（大阪男子：77.3%→60.4%、大阪女子：75.0%→67.1%）。

前回調査との比較が可能なその他の項目の中で、その変化が目につくのは、戦争についての考え方である（表10参照）。前回調査では過半数の人が、「近い将来核兵器を使った戦争が起こる」と考えていたが、今回の調査では、逆に「起こらない」と思う人が過半数を超えた。これは、もちろんソビエトの崩壊による東西冷戦の終結がこうした変化を起こした原因として考えられる。「近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険がある」と考える人が減った（70.0%→65.3%）のも、同じ原因が考えられる。東西冷戦の終結以外にも、この5年の間には、湾岸戦争、自衛隊のPKO

23) 市町村長：62.9%→61.7%，市町村議会：46.8%→37.6%，都道府県知事：63.7%→59.0%，都道府県議会：40.2%→35.6%，参議院：50.1%→61.0%，衆議院：56.1%→67.4%。

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

表10 戦争等に関する意見（87年—92年）

実数（％）

	前回(87)調査	今回(92)調査
（核兵器を使った戦争が起こると思うか）		
1. 思う	308(56.0)	261(44.6)
2. 思わない	234(42.5)	321(54.9)
DK. NA.	8(1.5)	3(0.5)
（日本が戦争に巻き込まれる危険があると思うか）		
1. 思う	385(70.0)	382(65.3)
2. 思わない	156(28.4)	200(34.2)
DK. NA.	9(1.6)	3(0.5)
（戦争について）		
1. いかなる場合でもいけない	403(73.3)	355(60.7)
2. 自衛のためならやむをえない	126(22.9)	203(34.7)
3. 助力の要請があれば介入してもよい	3(0.5)	15(2.6)
4. 積極的に利用してもよい	7(1.3)	11(1.9)
DK. NA.	11(2.0)	1(0.2)
（自衛隊について）		
1. 増強すべき	26(4.7)	25(4.3)
2. 現状維持	217(39.5)	246(42.1)
3. 縮小すべき	179(32.5)	197(33.7)
4. 無くすべき	117(21.3)	117(20.0)
DK. AN.	11(2.0)	
（自衛隊は合憲か）		
1. 合憲である	67(12.2)	108(18.5)
2. 違憲である	208(37.8)	251(42.9)
3. どちらとも言えない	268(48.7)	226(38.6)
DK. NA.	7(1.3)	
（反核・平和運動に参加したいと思ったことがあるか）		
1. ある	115(20.9)	114(19.5)
2. ない	425(77.3)	471(80.5)
DK. NA.	10(1.8)	
（徴兵制の反対運動に参加するか）		
1. 参加する	390(70.9)	390(66.7)
2. 参加しない	146(26.5)	192(32.8)
DK. NA.	14(2.5)	3(0.5)

への参加といった新しい事態が生じてきており、これらはどのような影響を与えているだろうか。もっとも端的な形で表われるのが、戦争の是非を問うた問いである。前回3/4近くあった「いかなる場合でも戦争はいけない」という意見が減り（73.3%→60.7%）、「自国を他国からの侵略から守るためにはやむをえない」という意見が増えた（22.9%→34.7%）。湾岸戦争の際に一部で唱えられた「他国の戦争であっても、助力の要請があれば介入してもよい」という意見は微増に留まった（0.5%→2.6%）が、自衛のためならやむをえないという意見を増加させたのは、やはり湾岸戦争が軍事力行使に対して日本人の多くが持っていた漠然とした不安感を弱める役割を果たしたこ

とが大きいと考えられる。また、徴兵制の反対運動への参加意欲がやや減った(70.9%→66.7%)のも、湾岸戦争、PKO参加が、これまで日本人の頭にこびりついていた「軍隊＝侵略戦争」といった連想を弱め、「軍隊＝平和維持活動」といった新しい連想をさせるようになったことの影響が出たのではないかと考えられる。

おわりに

前回の調査から5年しか経っていないので、今回の調査で捉えられた若者の価値観は基本的に前回提示した「個同保楽主義」のままであると言ってよいだろう。ただ今回の調査では、「個」や「楽」の部分より、「同」や「保」の部分が「協調的安定志向」の強まりという形で、やや前面に出てきた感じがする。「個性重視」が強調される中で、現実においては、個性的な学生は減少してきているという印象は最近とみに増している。89年に起きた「連続少女誘拐殺人事件」などもこうした傾向へ拍車をかける役割を果たしたと考えられる。自分の趣味に没頭し、ひとりで時間を過ごすことの多い人間を「おたく」と称し差別する風潮は、この事件以来一般化した。「おたく」というラベルを貼られないためには、あまり個人主義的行動はせず、たくさんの友人とつきあい、「コミュニケーション不全症候群」²⁴⁾に陥っていないことを示し続ける必要があると、若者たちが無意識の内に思い込んでも仕方がない程の影響をもった事件だったように思われる。

今回の調査で顕著に顕われた結果として、男子学生の社会関心の低下と、「旧人類的若者の革新性」²⁵⁾のさらなる衰退が目立つ。豊かで安定した日本社会において、次代を担うべき若者たちは社会の進むべき方向を見出せずにいる。日本はさらに豊かになってよいのか、いけないのだとしたらどこに社会の目標を指定すべきなのだろうか。目標を見出せない若者たちは社会関心を持たず、自分と家族と仲間たちだけの身近な世界に逃げ込むという選択をすることによって、精神的不安定状態から脱却している。実際自分たちが関与しなくとも社会は順調に動いてきたし、これからも動いていくだろうと考えている。こうして若者の社会関心の低下、政治離れ、現状維持志向の広まりが生じているのである。その意味で、これは若者全体に当てはまる問題なのだが、女子学生の場合は、女性であるがゆえに自分自身の問題として考えなければならない不平等な問題が、女性が社会に進出すればするほど露見してきているために、男子学生ほどには社会関心を低下させずにいる。

社会体制や社会的権威に対する批判意識が弱いばかりでなく、若者たちは親という権威に対し

24) 「コミュニケーション不全症候群」とは、中島梓によって用いられた言葉で、従来人が自然に行ないえていた他者とのコミュニケーションをうまく行ないえなくなっていることを言う。中島梓『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房、1991年、参照。

25) 社会の周辺部に位置する若者が、その位置ゆえに社会の中核を形成する体制や権威に対して批判精神を持つことを言う。60年代までは、若者に非常に多かった立場。片桐新自、前掲論文、141頁参照。

でも批判どころか、逆にかなり高い肯定的評価を与えている。やさしく家族思いの両親と従順で素直な子どもたちが作り出す親子関係は非常に良好で、良好すぎて親離れ、子離れが進まないのではないかと思わせるほどだ。実際学生たちに話を聞いても、反抗期らしい反抗期を経験していないと言う者が少なくない。反権威主義的志向の強かったかつての若者たちが親となって作り出した家庭では、親だからというだけで権威がふりかざされることは少なく、その子どもたちは親に対する強い反発を感じずに成長してきたのではないだろうか。伝統的性別役割に対する意識が薄れつつあるのも、かつての親たちの世代より、現在の親たちの方がはるかに平等化が進んでいることがやはり影響していると考えられる。

最後に、専門家的禁欲さを破って多少大胆な予測をしてみたい。前回の調査を企画した際に持っていた「若者の価値観を把握することによって、今後の日本社会の趨勢を見極めることができるはずだ」という問題意識にひとつの答えを出してみたい。前回そして今回と確認された「個同保楽主義」という価値観は、単なる一時的なものではなく、現在の日本社会の特徴——豊かで安定した中流意識社会——が必然的に生み出したものなので、激的な変化——たとえば、世界大戦の勃発等——がない限り、今後も確実に広がり日本社会の中心的価値観になることはほぼまちがいないと思われる。少なくとも、後20～30年経った時には、こうした価値観を身につけた現在の若者たちが社会の中樞を担っている。その時に、日本はどのような社会になっているだろうか。おそらく、社会的に沈滞ムードの漂う衰退期に入っているのではないだろうか。この「個同保楽主義」の価値観を持つ者は、指示を受けて働く組織のフォロワーメンバーとしてはそれなりに使えるが、失敗を恐れずに自分自身が全体を引っ張っていかうというリーダータイプではない²⁶⁾。日本社会はリーダー不在の状況に直面することになる。これまでの日本のように、経済的な発展を社会の進むべき方向として持ち続けることができれば、リーダー不在でも社会はそれなりに動いていくことができるが、すでに国際的に見てトップになってしまった日本が20～30年後にも同じ目標を持ち続けていられるとは考えがたい²⁷⁾。目標を失った社会の中で指示を待つ人々は、さらに社会を衰退へと向わせるのに大きな役割を果たすことになる。長い世界の歴史の中で繰返し現われた繁栄から衰退への峠を今や日本が越えようとしているような気がする。もしかしたら、「個同保楽主義」という価値観は、この峠にさしかかったすべての社会で現われ、社会を衰退に向わせる価値観なのかもしれない。

[付記：本研究は、平成3年度文部省科学研究費補助金（課題番号 03851043）を受け、行なわれたものである。]

26) 「パックス・アメリカナ」を謳歌していた50年代のアメリカ社会の中に、ミルズが見出した「陽気なロボット」との類似性が感じられる。C. W. Mills, *White Collar—The American Middle Classes*, Oxford University Press, 1951 (杉政孝訳『ホワイト・カラー』東京創元社, 1957年) 参照。

27) 今回の調査でも、日本のさらなる経済的発展を肯定する学生は、約4割しかおらず、6割近くの学生は否定している(Q39参照)。

現代学生の意識と行動

1992年11月

桃山学院大学	125(21.4)	社会学部	282(48.2)	1回生	168(28.7)	18歳	41(7.0)
関西大学	160(27.4)	人間科学部	76(13.0)	2回生	235(40.2)	19歳	168(28.7)
関西学院大学	100(17.1)	法学部	14(2.4)	3回生	110(18.8)	20歳	166(28.4)
大阪大学	77(13.2)	文学部	145(24.8)	4回生	72(12.3)	21歳	128(21.9)
神戸学院大学	55(9.4)	その他	68(11.6)			22歳	48(8.2)
短期大学	68(11.6)					23歳以上	33(5.6)
						DK. NA.	1(0.2)
		男	244(41.7)	女	341(58.3)		

Q 1 あなたの出身地はどこですか。市町村までお答え下さい。(出身地がわかりにくい方は、これまで最も長くお住まいになった所を記入して下さい。)

[アフターコード]

- | | | | |
|------------|-----------|----------|-----------|
| 1. 三大都市圏市部 | 356(60.9) | 2. その他市部 | 153(26.2) |
| 3. 郡部 | 68(11.6) | DK. NA. | 8(1.4) |

Q 2 あなたは大学の授業によく出席しますか。

- | | | | |
|-------------|-----------|--------------|-----------|
| 1. よく出席する | 211(36.1) | 2. まあまあ出席する | 270(46.2) |
| 3. あまり出席しない | 84(14.4) | 4. ほとんど出席しない | 19(3.2) |
| | | DK. NA. | 1(0.2) |

Q 3 大学への入学目的は何ですか。あてはまるものすべてに○をして下さい。

- | | |
|--------------------------|-----------|
| 1. 学びたいことがあったから | 321(54.9) |
| 2. 就職を有利にするため | 210(35.9) |
| 3. 友人を作るため | 238(40.7) |
| 4. 遊びたかったから | 188(32.1) |
| 5. 大卒の肩書きが欲しかったから | 220(37.6) |
| 6. 教員免許等の資格が欲しかったから | 83(14.2) |
| 7. 社会に出る前にもう少し時間が欲しかったから | 396(67.7) |
| 8. その他(具体的に:) | 49(8.4) |

Q 4 親子関係についてお伺いします。まず、あなた、自分のおとうさんをどう思いますか。あてはまるところに○をつけて下さい。

	非常に思う	まあ思う	あまり 思わない	全く 思わない	DK. NA.
a. 仕事熱心	290(49.6)	231(39.5)	49(8.4)	5(0.9)	10(1.7)
b. 家族思い(やさしい)	178(30.4)	274(46.8)	100(17.1)	23(3.9)	10(1.7)
c. 頼りがいがある	175(29.9)	268(45.8)	105(17.9)	27(4.6)	10(1.7)
d. 尊敬できる	169(28.9)	267(45.6)	109(18.6)	30(5.1)	10(1.7)
e. 自分を理解してくれている	69(11.8)	252(43.1)	196(33.5)	57(9.7)	11(1.9)
f. こわい	45(7.7)	116(19.8)	252(43.1)	161(27.5)	11(1.9)
g. うるさい	73(12.5)	145(24.8)	204(34.9)	152(26.0)	11(1.9)
h. うっとうしい	38(6.5)	112(19.1)	249(42.6)	176(30.1)	10(1.7)

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

Q5 では、おかあさんはどうですか。やはり、あてはまるところに○をつけて下さい。

	非常に思う	まあ思う	あまり 思わない	全く 思わない	DK. NA.
a. 仕事（または家事）に熱心	286(48.9)	230(39.3)	57(9.7)	8(1.4)	4(0.7)
b. 家族思い（やさしい）	270(46.2)	268(45.8)	38(6.5)	5(0.9)	4(0.7)
c. 頼りがいがある	172(29.4)	269(46.0)	117(20.0)	23(3.9)	4(0.7)
d. 尊敬できる	175(29.9)	279(47.7)	109(18.6)	18(3.1)	4(0.7)
e. 自分を理解してくれている	145(24.8)	275(47.0)	130(22.2)	30(5.1)	5(0.9)
f. こわい	25(4.3)	103(17.6)	272(46.5)	181(30.9)	4(0.7)
g. うるさい	89(15.2)	198(33.8)	211(36.1)	82(14.0)	5(0.9)
h. うっとうしい	29(5.0)	106(18.1)	262(44.8)	182(31.1)	6(1.0)

Q6 あなたは、御両親の期待どおりに育っていると思いますか。

1. 思 う 303(51.8) 2. 思わない 276(47.2) DK. NA. 6(1.0)

Q7 将来、自分の両親と一緒に住みたいと思いますか。

1. 思 う 182(31.1) 2. 思わない 397(67.6) DK. NA. 6(1.0)

Q8 将来、あなたのおとうさんのような父親になりたいと思いますか。[男性の方へ]

将来、あなたのおかあさんのような母親になりたいと思いますか。[女性の方へ]

1. 思 う 128(21.9) 2. やや思う 209(35.7)
3. あまり思わない 168(28.7) 4. まったく思わない 78(13.3) DK. NA. 2(0.3)

Q9 次に友人関係についてお伺いします。あなたには、現在、親友と呼べる友達が何人ぐらいいますか。

0人 21(3.6) 1人 29(5.0) 2人 67(11.5) 3人 114(19.5)
4人 79(13.5) 5人 125(21.4) 6～9人 62(10.6) 10人 41(7.0)
11～20人 24(4.2) 21人以上 8(1.3) DK. NA. 15(2.6) 平均 5.04人

Q10 もしも親友の考え方や行動がちがっていると思った時、あなたはどうしますか。

1. まちがっていると指摘する。 361(61.7)
2. 人それぞれ考え方は違うから、別に何も言わない。 220(37.6) DK. NA. 4(0.7)

Q11 あなたは、どのような性質の友人を好みますか。以下にあげるものから、もっとも重要だと思うものを3つ選んで下さい。

1. かっこいい 7(1.2) 2. 礼儀正しい 61(10.4) 3. 頼りになる 176(30.1)
4. 知的な 78(13.3) 5. 正直な 194(33.2) 6. 明るい 196(33.5)
7. まじめな 65(11.1) 8. 男(女)らしい 13(2.2) 9. 寛大な 83(14.2)
10. 元気な 54(9.2) 11. 思いやりのある 293(50.1) 12. 責任感のある 140(23.9)
13. ユーモアがある 129(22.1) 14. 親切的な 43(7.4) 15. 聞き上手な 19(3.2)
16. ノリのよい 77(13.2) DK. NA. 36(6.2)

Q12 友達と何かをしようという時に、あなただけしたいことが異なっていた場合、どうしますか。

1. みんなに合わせる。 467(79.8)
2. 一人でも自分のしたいことをする。 112(19.1) DK. NA. 6(1.0)

関西大学『社会学部紀要』第25巻第2号

- Q13 あなたは、以下にあげるようなことがどの程度ありますか。
- | | よくある | たまにある | ほとんどない | DK. NA. |
|------------------------|-----------|-----------|-----------|---------|
| a. 一人でいるのが寂しいと思うことがある。 | 111(19.0) | 349(59.7) | 125(21.4) | |
| b. 友人を探して、一緒に昼食を食べに行く。 | 198(33.8) | 216(36.9) | 171(29.2) | |
| c. 授業の時、友人と並んで座る。 | 371(63.4) | 145(24.8) | 69(11.8) | |
| d. 友人と一緒にトイレに行く。 | 71(12.1) | 191(32.6) | 323(55.2) | |
| e. 特別な目的もなく友人とぶらぶらする。 | 123(21.0) | 262(44.8) | 197(33.7) | 3(0.5) |
- Q14 親友と恋人との約束が重なった場合、あなたはどちらを優先しますか。
1. 親友 190(32.5) 2. 恋人 353(60.3) DK. NA. 42(7.2)
- Q15 もう一度生まれ変わるとしたら、男と女のどちらに生まれてきたいですか。
1. 男 344(58.8) 2. 女 236(40.3) DK. NA. 5(0.9)
- Q16 デートの際にかかった費用は、男女間でどのように負担すべきだと思いますか。
- 男(5.88)割 : 女(4.12)割 [平均]
- Q17 あなたは、「男らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[男性の方へ]
あなたは、「女らしいね」と言われたら、嬉しいですか。[女性の方へ]
1. はい 265(45.3)
2. いいえ 32(5.5)
3. 一概に言えない 287(49.1) DK. NA. 1(0.2)
- Q18 「男らしさ」や「女らしさ」は必要だと思いますか。
1. 絶対必要である。 124(21.2)
2. どちらかといえば必要である。 361(61.7)
3. どちらかといえば必要ではない。 81(13.8)
4. まったく必要ではない。 19(3.2)
- Q19 一般に結婚した男女は、名字をどのようにしたらよいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
1. 当然、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のべきだ。 66(11.3)
2. 現状では、妻が名字を改めて、夫の方の名字を名のった方がよい。 214(36.6)
3. 夫婦は同じ名字を名のべきだが、どちらが名字を改めてもよい。 226(38.6)
4. わざわざ一方に合わせる必要はなく、夫と妻は別々の名字のままでよい。 78(13.3)
DK. NA. 1(0.2)
- Q20 結婚した女性が職業を持ち続けることについて、どうお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。
1. 結婚したら、家庭を守ることに専念した方がよい。 79(13.5)
2. 結婚しても子どもができるまでは、職業を持っていた方がよい。 242(41.4)
3. 結婚して子どもが生まれても、できるだけ職業を持ち続けた方がよい。 256(43.8)
DK. NA. 8(1.4)

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

Q21 家事や育児を夫婦はどのように分担すべきだと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

- | | |
|-------------------------------------------|-----------|
| 1. 本来女性の方が向いているので、妻がやった方がよい。 | 30(5.1) |
| 2. どちらかといえば、女性の方が向いていると思うが、夫もできるだけ協力すべきだ。 | 418(71.5) |
| 3. どちらの方が向いているかなどとは言えないので、公平に分担すべきだ。 | 136(23.2) |
| DK. NA. | 1(0.2) |

Q22 結婚していない若い人たちの男女関係について、どのようにお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 1. 結婚式がすむまでは、性的まじわりをすべきではない。 | 27(4.6) |
| 2. 結婚の約束をした間柄なら、性的まじわりがあってもよい。 | 53(9.1) |
| 3. 深く愛し合っている男女なら、性的まじわりがあってもよい。 | 415(70.9) |
| 4. 性的まじわりをもつのに、結婚とか愛とかは関係ない。 | 83(14.2) |
| DK. NA. | 7(1.2) |

Q23 あなたは現在の生活にどの程度満足していますか。

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1. かなり満足している | 72(12.3) |
| 2. どちらかといえば満足している | 316(54.0) |
| 3. どちらかといえば不満だ | 161(27.5) |
| 4. かなり不満だ | 34(5.8) |
| DK. NA. | 2(0.3) |

Q24 ここに二つの人生観があります。しいていえば、あなたの考えはどちらに近いですか。

- | | |
|------------------------------------------------|-----------|
| 1. 人生は要するに闘争だ。他人との競争に打ち勝てなければ何事もできない。 | 194(33.2) |
| 2. 他人と争うのはよくない。何事も丸くおさめて自然のなりゆきに従っていくのが賢いやり方だ。 | 385(65.8) |
| DK. NA. | 6(1.0) |

Q25 人によって生活の目標もいろいろですが、以下のように分けると、あなたの生活目標にいちばん近いのはどれですか。

- | | |
|--------------------------|-----------|
| 1. その日その日を、自由に楽しく過ごす。 | 166(28.4) |
| 2. しっかりと計画をたてて、豊かな生活を築く。 | 169(28.9) |
| 3. 身近な人たちと、なごやかな毎日を送る。 | 204(34.9) |
| 4. みんなと力を合わせて、世の中をよくする。 | 37(6.3) |
| DK. NA. | 6(1.0) |

Q26 以下にあげるようなことについて、あなたはどのように思いますか。

- | | そう思う | そうは
思わない | DK. NA. |
|-------------------------------|-----------|-------------|---------|
| a. 将来のために、若い頃の苦勞は買ってでもした方がいい。 | 377(64.4) | 207(35.4) | 1(0.2) |
| b. 早く社会に出て働きたい。 | 155(26.5) | 429(73.3) | 1(0.2) |
| c. おとなになるより、子どものままでいたい。 | 259(44.3) | 325(55.6) | 1(0.2) |
| d. 自分は今後社会の役に立てる。 | 242(41.4) | 340(58.1) | 3(0.5) |
| e. 早く親から自立したい。 | 445(76.1) | 138(23.6) | 2(0.3) |
| f. もう自分はおとなだと思う。 | 148(25.3) | 434(74.2) | 3(0.5) |

関西大学『社会学部紀要』第25巻第2号

- g. 自分は、今の社会になんらかの影響を与えている。 93(15.9) 490(83.8) 2(0.3)
- h. ある程度の収入さえ得られるなら、出世するより気楽な地位にいる方がいい。 361(61.7) 219(37.4) 5(0.9)
- i. 働かないでも楽に暮していけるだけのお金があれば、遊んで暮したい。 247(42.2) 334(57.1) 4(0.7)

Q27 あなたは就職したら、仕事と余暇のバランスをどのようにとっていきたいとお考えですか。あなたのお考えにもっとも近いものを選んで下さい。

1. 仕事よりも、余暇に生きがいを求める。 36(6.2)
2. 仕事はさっさとかたづけて、できるだけ余暇を楽しむようにする。 133(22.7)
3. 仕事にも余暇にも同じぐらい力をいれる。 334(57.1)
4. 余暇も時には楽しむが、仕事の方に力を注ぐ。 68(11.6)
5. 仕事に生きがいを求めて、全力を傾ける。 11(1.9)
- DK. NA. 3(0.5)

Q28 ある会社に次のような二人の課長がいるとします。もしあなたが使われるとしたら、どちらの課長がよいですか。

1. 規則をまげてまで、無理な仕事をさせることはありませんが、仕事以外のことで人のめんどうを見ません。 168(28.7)
2. 時には規則をまげて、無理な仕事をさせることもありますが、仕事のこと以外でも人のめんどうをよく見ます。 409(69.9)
- DK. NA. 8(1.4)

Q29 あなたは新聞の各記事をどの程度読みますか。下記の1, 2, 3のいずれかを()内に書き入れて下さい。[「1. 必ず読む」を2点, 「2. 時々読む」を1点, 「3. ほとんど読まない」を0点として計算した得点]

- a. 政治・外交面 (0.93) b. 社会記事 (1.28) c. 社説 (0.65)
- d. 家庭婦人欄 (0.69) e. 小説 (0.21) f. スポーツ記事 (1.22)
- g. 投書 (0.89) h. 地方版 (0.95) i. ラジオ欄 (0.49)
- j. テレビ欄 (1.77) k. 経済面 (0.53) l. マンガ (1.11)

Q30 以下にあげる昨年(1991年)のニュースのうち、あなたにとってもっとも印象深いものを3つ選び、特に印象の強いものから順に1, 2, 3の番号をつけて下さい。

[1を30点, 2を20点, 3を10点として計算した得点]

- a. 宮沢内閣発足 (0.41) b. 若貴ブーム (1.74)
- c. 四大証券損失補填発覚 (1.44) d. 雲仙普賢岳火砕流発生 (6.78)
- e. 信楽高原鉄道列車衝突事故 (1.00) f. 宮沢りえヌード写真集発売 (3.16)
- g. イトマン事件 (0.57) h. 紀子妃女兒出産 (0.65)
- i. 広島橋げた落下事故 (1.09) j. 「幸福の科学」講談社に抗議 (0.98)
- k. トレンディードラマ・ブーム (0.92) l. 明治大学替え玉入試事件 (1.55)
- m. 育児休業法成立 (0.30) n. ソビエト連邦解体 (13.90)
- o. 従軍慰安婦問題 (1.85) p. 地球温暖化現象 (2.74)
- q. 湾岸戦争勃発 (20.02) r. 政治改革関連三法案廃案 (0.24)
- s. 東海大学ガン患者安楽死事件 (0.85)

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

Q31 あなたは何か信仰とか信心とかを持っていますか。

1. 持っている 109(18.6) 2. 持っていない 473(80.9) DK. NA. 3(0.5)

Q32 以下にあげるものの中であなたが行なっているものがありますか。行なっているものすべてに○をして下さい。

1. 普段から礼拝・お勤め・修行・布教など宗教的な行ないをしている。 36(6.2)
 2. 年に1, 2回程度は墓参りをしている。 303(51.8)
 3. 聖書・経典など宗教関係の本をおりにふれ読んでいる。 54(9.2)
 4. この1, 2年の間に身の安全や商売繁盛, 入試合格などを祈願しに行ったことがある。 273(46.7)
 5. お守りやおふだなど, 魔よけや縁起ものを自分の身のまわりにおいている。 205(35.0)
 6. この1, 2年の間におみくじを引いたり, 易や占いをしてもらったことがある。 349(59.7)
 7. 宗教とか信仰とかに関係していると思われることがらは何も行なっていない。 82(14.0)

Q33 あなたは何か困ったことが起こった時, 「神様」とか「仏様」とか心の中で叫んだり, お祈りしたくなることがありますか。

1. ある 364(62.2) 2. ない 218(37.3) DK. NA. 3(0.5)

Q34 あなたは, 次にあげるどの選挙なら投票に行こうと思いますか。行こうと思うものすべて○をして下さい。(選挙権のない方もあるものと考えて答えして下さい。)

1. 市町村長 361(61.7) 2. 市町村議会 220(37.6)
 3. 都道府県知事 345(59.0) 4. 都道府県議会 208(35.6)
 5. 参議院 357(61.0) 6. 衆議院 394(67.4) DK. NA. 3(0.5)

Q35 あなたは, どの政党を支持していますか。〔スポーツ平和党は, アフターコード〕

1. 自民党 76(13.0) 2. 社会党 15(2.6) 3. 公明党 1(0.2)
 4. 共産党 15(2.6) 5. 民社党 1(0.2) 6. 社民連 5(0.9)
 7. 日本新党 11(1.9) (スポーツ平和党) 6(1.0) 8. その他 1(0.2)
 9. ない 450(76.9) DK. NA. 4(0.7)

(Q35で「9. ない」と答えた方に)〔スポーツ平和党は, アフターコード〕

S Q35-1 しいていば, どの政党が支持できそうですか。

1. 自民党 103(17.6) 2. 社会党 55(9.4) 3. 公明党 7(1.2)
 4. 共産党 19(3.2) 5. 民社党 5(0.9) 6. 社民連 17(2.9)
 7. 日本新党 39(6.7) (スポーツ平和党) 4(0.7) 8. その他 3(0.5)
 9. ない 190(32.5) DK. NA. 13(2.2) 非該当 130(22.2)

(以下全員に)

Q36 では逆に嫌いな政党はありますか。あればいくつでも○をつけて下さい。

1. 自民党 258(44.1) 2. 社会党 130(22.2) 3. 公明党 191(32.6)
 4. 共産党 194(33.2) 5. 民社党 102(17.4) 6. 社民連 46(7.9)
 7. 日本新党 35(6.0) 8. その他 11(1.9)
 9. ない 164(28.0) DK. NA. 2(0.3)

Q37 今の世の中は権力をもった少数の人によって動かされているという意見がありますが、あなたはどう思いますか。

1. そう思う 345(59.0)
 2. そう思わない 53(9.1)
 3. 一概には言えない 184(31.5)
- DK. NA. 3(0.5)

Q38 次にあげる社会のうちで、あなたの理想とする社会に近いのはどれですか。

1. 自由に競争ができて、能力のある人はどんどん金持ちになれるが、暮らしに困る人もでる社会 71(12.1)
 2. 国が経済を統制するので、大金持ちにはなれないが最低限の生活は確実に保証されている社会 136(23.2)
 3. 能力のある人は金持ちになれるが、国がその人たちから高い税金をとって暮らしに困る人の面倒をみる社会 370(63.2)
- DK. NA. 8(1.4)

Q39 日本はもっと経済的に発展すべきだと思いますか。

1. そう思う 243(41.5)
 2. そうは思わない 339(57.9)
- DK. NA. 3(0.5)

Q40 近い将来、核兵器を使った戦争が起こると思いますか。

1. 思 う 261(44.6)
 2. 思わない 321(54.9)
- DK. NA. 3(0.5)

Q41 現在の世界情勢から考えて、近い将来日本が戦争に巻き込まれる危険があると思いますか。

1. 思 う 382(65.3)
 2. 思わない 200(34.2)
- DK. NA. 3(0.5)

Q42 戦争は絶対にいけないと思いますか。あなたのお考えにもっとも近いものを以下の中からひとつだけ選んで下さい。

1. いかなる場合でも戦争はいけない。 355(60.7)
 2. 自国を他国からの侵略から守るためにはやむをえない。 203(34.7)
 3. 他国の戦争であっても、助力の要請があれば介入してもよい。 15(2.6)
 4. 必要があれば、積極的に戦争という手段を利用してもよい。 11(1.9)
- DK. NA. 1(0.2)

Q43 日本の自衛隊をどうすべきだと思いますか。

1. 増強すべき 25(4.3)
2. 現状維持 246(42.1)
3. 縮小すべき 197(33.7)
4. 無くすべき 117(20.0)

Q44 自衛隊は合憲だと思いますか。

1. 合憲である 108(18.5)
2. 違憲である 251(42.9)
3. どちらとも言えない 226(38.6)

Q45 いずれ日本も核武装したほうがいいと思いますか。

1. 思 う 41(7.0)
2. 思わない 544(93.0)

若者のコミュニケーションと価値観（片桐）

Q46 現在様々な反核・平和運動がありますが、あなたはこうした運動に参加したいと思ったことがありますか。

1. ある 114(19.5) 2. ない 471(80.5)

Q47 では徴兵制が実施されそうになった場合、あなたはその反対運動に参加しますか。

1. 参加する 390(66.7) 2. 参加しない 192(32.8) DK. NA. 3(0.5)

Q48 天皇制についてどう思いますか。

1. 強化した方がよい 3(0.5)
2. 今のままがよい 435(74.4)
3. 無くした方がよい 145(24.8) DK. NA. 2(0.3)

Q49 最後に、あなたにとって、いちばん大切と思うものをひとつだけあげてください。

[アフターコード]

- | | |
|---------------------|-----------|
| 1. 自分, 生命, 健康, 生活 | 134(22.9) |
| 2. 家族, 友人, 恋人, 人間関係 | 159(27.2) |
| 3. 愛情, 優しさ, 精神, 心 | 79(13.5) |
| 4. 信念, 能力, 努力 | 48(8.2) |
| 5. 生きがい, やりがい, 夢 | 19(3.2) |
| 6. 平和, 真実, 平等 | 24(4.1) |
| 7. 自然, 環境 | 9(1.5) |
| 8. 時間, 自由 | 29(5.0) |
| 9. 金, 財産 | 14(2.4) |
| 10. その他 | 22(3.8) |
| DK. NA. | 48(8.2) |